

人形律

えむ

これはちょっと昔の話だ。

どれくらい昔かは、ここには書かない。

これはただの思い出話だから・・・

○

律は人形造りだ。

この春、高校に入学するのと同時に、師匠である祖父から免許皆伝を受けた。

人形造りの免許皆伝って、一体どんなものだと思う？

意味だけを問うなら、辞書にはこうある。

「芸道・武道などで、師匠が弟子にその道の奥義を残らず伝授すること」

でもまだ、想像つかないだろう？

俺も同じ。

聞いた所によると、一人前とみなされて、今まで禁止されていたことが、解禁になるのだそうだ。

『それはめでてえな』と、何が禁止されていたのかということにすら、興味を示さなかった俺は、漫画雑誌を読みつつも、とりあえず心からの拍手を送った。

拍手につつまれた、誠意だけはホンモノ。

これから律は、ちゃんと客の依頼を受けて、人形を創ることも、売ることもできる。今までは、家に飾ってあった作品が、たまたま、爺さんの客の目に止まって売却、という運びになることはあっても、通常の人形業界の流通に乗って、一般の店舗に律の作品がでまわることは皆無だった。

よって、現在に至るまで、律は自分の人形を店頭で売ったことも、個人からの注文を受けて、金銭のやり取りがからむ人形制作を行ったこともない。たとえ頼まれて作っても、けしてお金を受け取ってはいけないと、厳しく爺さんに戒められていたからだ。

だが、この春からはすべてが変わる。

今も、この無表情な友人は、パソコン机に向かって座る俺の隣で、立ったまま腕を組み、あさっての方角を向きながら、明るい未来に思いをはせているのだろう、『ちゃんと金が取れる...ちゃんと金が取れる』と、かすかにつぶやきつつ、うっすらとした笑いに目を細めている。

細目に細い眉、薄い唇と細い顎。色素が薄くねこっ毛の、将来非常に心もとなそうな厚みのない髪と、作務衣の袖口やすそからのぞく、ひょろりとした長い手足。

無表情のときは、朴訥かつ軟弱な雰囲気を漂わせているくせに、微笑むと急に、じわりと力のにじむ、腹黒い策士みたいな顔になる。身長170センチ、体重は知らないが、細い腕はかなりの筋肉質だ。たいした俊足ではないが、敏捷で、口数は少ないが女子の友達が多い。性格はかなり異様.....

う、律！ スリッパで頭殴るんじゃないねえ！

いや、スリッパはともかく.....この免許皆伝のおかげで、俺はこんな文章を書かされている。律が人形作りであることを、宣伝しろというのだ。

勿論、俺は、断った。

『なんで俺が、そんな面倒なことをしなきゃならんのだ』と。

無償で行う幼馴染のための営業活動補助よりも、全く興味の惹かれない免許皆伝の中身よりも、帰宅時間までの読み終わりたい週刊漫画雑誌のほうが、俺にはよっぽど重要だった。

だが、

『やりたくなきゃ、やらなくてもいいよ』

奴はいつもの取り澄ました顔でいった。そして、

『そのかわり、弘、この先一生、僕の家に入り禁止』と、続けた。

俺は負けた。

別に律の家に行けなくなったらかなしいとか、よきにつけあしきにつけ、付き合いの深い幼馴染みに会えなくなるのがつらいとか、そんな感傷的心理の結果ではない。

ささやかな頼みごとくらい、やってやってもいいかという、友愛的発想が頭に浮かんだわけでもない。

律の言葉に反応して、わが脳内のシナプスで行われた情報伝達の結果が、律の部屋にあるCD、DVD、漫画および小説の山々への、極々即物的執着で、九割九分九厘を締められていたというだけのことだ。

律の家の家政婦さんが作る、シフォンケーキや、アップルパイ、ビーフシチューとカツ丼なんかも、コンマー秒遅れくらいで、俺の即物的原動力を強力に後押しした。

とはいえ、よほど苦々しい顔をしていたのだろう。律は俺を夕食に誘うという古典的な方法で、わずかに残っていた頑固な俺の自尊心を、強力かつ効果的に懐柔した。

結果、俺は事態を（もしくは非常に美味であった夕食を）きわめて前向きに捉え、空腹を満たしたノラ猫のように心置きなく満足した胃に、感情の主導権を渡して、至極まじめに、律の部屋でキーボードを叩いている訳だ。

どうして俺が他人が所有する前述の品々に、みっともないほど即物的執着をいだくのか。

それは俺がビンボーだからだ。

ビンボー神も裸足で逃げ出して、二度と帰ってこないくらいのビンボー。

そう、そのビンボー神は、不幸にも俺の親父という肩書きで、母さんが稼いだすずめの涙みtainな現金を、片端から競馬、パチンコ、酒や女に使いまくった。挙げ句の果てには、稼ぎ手だった母さんが病気で死ぬや否や、俺を置いて行方をくらました。

当時、俺は七つ。

ときたま、おせっかいな人が同情してくれるが、正直言って、窒息しそうなほど鬱陶しくいらだたしい。目に涙なんて浮かべられた日には、それはもう、猛烈ダッシュでその場から退散する。

空っぽのポケットをさかさまにしたとき、ちらほら出てくる埃程度にさえ、『捨てられた悲しみ』なんてかわいらしい感情は存在しない。

たとえそれが実の親父であっても、相手は正真正銘のビンボー神。今思えば、半分ぐらい疫病神も交ざっていたとしても、不思議はないほどの不幸の運び手。

そんなものはいないにこしたことはない。誰にとっても、いないにこしたことはない。

おかげで、ビンボー神が消えて以来、俺の目方が標準体重をひどく下まわる事だけにはなくなった。

それでもまだ俺はビンボーだ。

身寄りがなくなった俺を、引き取ってくれたのは母方の叔母だった。この時も色々面倒なやりとりが俺の頭上でかわされたが、もう十年も前のことなので、はしょらせてもらう。聞いても不愉快になるだけの話を喧伝するほど、俺も恥知らずじゃない。

多大なる嫌悪感と共に、俺を引き取ってくれた叔母さんの家には、子供が三人。叔父さんは、一般企業の中堅営業マン。叔母さんは、扶養家族控除内で働くパートタイマー。自宅購入の為に三十年ローンは、あと二十年以上残りたっぷり。当然の事ながら、俺はタダ飯食らいの大荷物。この十六年間（母が生きていた時も、叔母の家に引き取られた後も）、小遣いなんてもらったためしがない。

勿論、ご飯を食べさせてもらえるだけ、本当に有り難いと思っている。恐れていた『中学卒業即就職』って事態もなく、高校の制服もそろえていただけた。

ただ、俺だって普通の子供。見たい映画、読みたいマンガや本もある。せめて、マンガ雑誌の話題ぐらいにはついていきたかったし、（流行モノを所有する事は、逆立ちしても不可能だ）なにより俺は、本が好きなのだ。マンガも小説も雑誌も。学校及び公立図書館についてはヘビーユーザーの域だが、図書館には置いていない本も多数ある。

かといって本代を手に入れる為に、小中学生がアルバイトをするなんてことは、ほとんど不可能に近い。いや、可能かもしれないが、一発で見つかる。そうすると叔母さんにとっては外聞も悪いから、迷惑になるし、俺は一層煙たがられるという悪循環に陥るわけだ。

そういう時、力になってくれたのが律だった。

小学生の頃からずっと、律だけは、同情も蔑みもせず、俺が読みたい本を頭痛がするまで読ませ、見たい映画やテレビ番組を目が乾くほど見せてくれた。律の家に来ているのに律の存在を忘れて、本やテレビ画面に夢中になってしまっても嫌な顔一つしない。

別に、優しい微笑みを浮かべているとか、上機嫌だとかいうわけでもないが。

物の使用に関しては、非常に鷹揚かつ寛大な律が、ただ一つ嫌うのは、自分の所有物を、自分のテリトリーから持ち出されることだ。俺がいくら好き放題楽しんでも文句ひとつ言わない代わりに、本やビデオ、DVDを家に持ちかえるのだけは絶対に許さない。だから、律の家に『立ち入り禁止』の札が下がってしまうと、俺はビデオもDVD、CDもおやつも、本も何一つ楽しむことはできないのだ。

律は俺が本好きなのを知っていて、よく自分の要求を押し通す切り札にこれを使う。卑怯だが効果は抜群だ。

非常に合理的な性格のわが友人。こいつの印象を一言で形容するなら『淡々とした人』だろうか。

怒りもするし、笑いもする。小さなころからの付き合いだから、取っ組み合いのけんかだって数限りない。ただ、一重瞼のやや細い目は、感情の起伏を余り表さない。律の作る人形の表情のほうが、よっぽど感情豊かじゃないかと思うくらいだ。

学校帰り、俺が律にくっついて奴の家に行くと、律はいつも黙々と着替えをすませ、人形造りの作業に取り掛かる。季節に関係なく、作務衣にはだしで、自分の部屋から続киになった土間の作業場におりる。そんな律を横目に、俺は奴の本棚と鞆を物色して、その人のお楽しみを見つけると、板間に座布団を置いて腰を下ろす。

本のページをめくる指の感触。

鑢とこすれる木の香り。

ぼりぼりとせんべいをむさぼる音。

俺と律は、思い思いに好きなことをしながら、思い出したように言葉を交わした。音楽をかけるときもあったし、無言のまま延々何時間もすごすこともあった。

ちなみに、律にも両親はいない。この古くて小ぶりの明治作りの洋館には、祖父（俺達は爺さんと呼ぶ。小学校4年頃から、さすがに“じいじ”とは、あまりにも恥ずかしくて、呼べなくなったため変形した）が一人と、通いの家政婦さんが一人いるだけだ。だからなのか、それとも元々そういう性格なのか、律はけして俺の境遇を哀れまないし、同情しない。気にもとめない。

一般には冷たいといわれるそういう律の態度が、一番の美德だと俺は思っている。

律の人形は綺麗だ。

俺が覚えている限りいつも、律の日常は学校と作業場の往復だった。家にいるほとんどの時間を作業場で過ごす。爺さんの指導を受けていることもあったし、自分でなにかに、“格闘”している時もあった。

年を追うごとに、爺さんが律の作業場に足を踏み入れる時間は少なくなり、一方で人形の出来栄は、反比例して際立っていった。

俺は素人だし、奴の仕事をじっくり見るなんてことを、十年近い付き合いの中で一度たりともしたことがないから、作業の詳細はわからないし知らない。

律の部屋からつながった作業場を、『ああ、のみを使ってるな』とか、『何かを型に流し込んでるな』とか、横目でちらっと見るきり。ずいぶん長いこと、作品自体にもそれほど興味はなかった。

当然だろう。玩具というよりは、工芸品に含まれる種類の人形に興味を持つ満七歳の男児なんて、地区半径十キロ以内にひとりもいれば、十分である。

それなのに、いつのころからだったろう。律が俺に出来上がった人形を見せるようになったのは……。

いつのまにか作業の音が止み、夜の闇が窓の外に迫っているのに気付く頃、背後に人の気配を感じて振り返ると、律が出来上がった人形を持って俺を見下ろしている。そして、滅多に感情をあらわにしない目を、興奮にきらきらさせながら同意を求めるのだ。

「いいだろう？」

そうすると、俺の目はその人形に吸い寄せられてしまう。もう、頷くしかできない。

白い頬に映える朱の唇の艶やかさと、生々とした彼らの表情は、動き出す寸前にストップモーションをかけられた生きた人間のようなようだった。作り物であるのがわかっているのに、鳥肌立つほど真に迫っていた。

ある時は日本髪の振り袖の娘が艶やかに微笑み、ある時は金髪をカールさせた白いドレスの天使が、目を閉じてまどろむ。鴉の羽みtainな黒髪をした、黒尽くめの冷たい顔の紳士が冴々とした表情でこちらを見つめ、あるいは気高い表情の巫女が一心に祈っている。

美しい、魅力的な人形たち。

人形は多くの手間と時間をかけてようやく一体作り上げられる。長い長い作業という沈黙の後で、顕れる艶やかなその姿。

その唐突さが、その鮮烈な印象が、いつしか俺を魅了した。

それは、高校に入学して約一ヶ月、ゴールデンウィークが明日から始まるという日の夕方のことだった。

黒い格子窓から、竹藪越しの夕日が差し込む律の部屋で、制服姿のまま俺は、いつもの通り読書に没頭していた。

「できた……」

ふふふっと、低い笑いが背後から聞こえて、俺は読みかけの小説から視線を上げた。

「できたのか。今度は何だ？ 振り袖の女の子か？ それとも武者の……？」

「何で和風だと思う？」

「いや、なんとなく」

床の上の座布団にあぐらを組んでいた俺は、読みかけの歴史小説に、丁寧にしおりを挟んで閉じ、作業場を振りかえった。雑然とした作業場は、十二畳もある板間の部屋から、ガラス戸を隔てて続いている。

作業場を見るたび、いつも俺は、母校の小学校にあった古い図工室の、乾いた雰囲気と独特の臭いを思い出す。彫刻刀やのみで傷ついた大きな作業テーブル。その下に無造作に収納された、正方形の座面をもつ無骨な木製の椅子。壁際にずらりとならんだ器具の大半は、使い込まれて黒ずんだ色合いを帯び、すすけた古いこの部屋の白壁や焦げ茶色の梁に、しっくりとなじんでいる。

俺にとって、ほとんどの道具類は、名前も知らないものばかりだが、さまざまな種類の鋸や金槌、のみや鑪、そして木材、石膏などが、いくつかのテーブルに散らばっているくらいは判別できた。

手ぬぐいを使いながら振り返る律は、いつも通り紺色の作務衣姿だ。夏も冬も変わらないその格好は、はっきりいっ

て時代錯誤なのに、奇妙に律の風貌にはまっている。学校で会う詰め襟の律とはちょっと違う雰囲気。

高校生には不釣り合いな落ち着きというべきだろうか。

律と爺さんが住む、時代からぼつんととりこされたこの明治作りの小さな洋館も、律の纏う空気に更に力を与えた。

高い天井、飴色に光る床と柱。

格子の窓とその向こうにうっそうと茂り、常にさざめきつづける深緑の竹林。

時代と共に移ろい、変化していく有象無象のもののなかで、確かに息づき続ける、侵す事の出来ない古く強い力。それが今も残る、今も人の生活と共にある古い館。

作業場の入り口に立った律は無表情な顔で、作務衣の上を脱ぎすてた。下に着ていたＴシャツをぱたぱたと仰ぎながら、答える。

「今回は、今風の服を着てる中年の女の人」

「中年の女の人？ へえ？ めずらしいな。そんなもの売り物になるのかよ」

俺は作業場のガラス戸に寄りかかりながら、一段低くなった作業場の中を覗き込んだ。

「特注品だよ。売り手はもう決まってる」

「もう、お前に依頼が来たのか？ 爺さんじゃなく？ そんなに名前売れてたっけ、律」

「まあね」

律は薄く笑った。

律の爺さんは、人形を扱う世界でちっとは名の知れた名人だったが、そもそもこの藤枝家、つまり律の家は、昔から人形を作っていたわけじゃない。

信州の農家の末っ子に生まれた爺さんが、半分押し掛けに近い形で人形のお師匠さんの所に弟子入りして、自力で名をあげたのだ。

一頃は、一世を風靡した人形造りと持て囃されたこともあったという爺さんは、今では『邪道』と呼ばれている。一つの技法に執着しないで、度を越えていろいろ試すもんだから、その節操と常識の無さにとうとう師匠に破門にされた。それが三十代ぐらいの頃らしいから、それ以来かれこれ三十年も自己流を貫いている。ものすごくわかりやすい頑固者だ。目の前に目的地への地図を差し出されたって、ぱんっとつっぱね、自分で藪の中に入っていくつつ、道を作るのを好むような性格。

一見、やさしげなまなざしの、真っ白い髪的年寄りだから、この経歴をはじめて聞いた時はけっこう驚いた。

そんなはぐれ者の人形造りだったが、個性が作品の魅力にも表れるのか、その評判は高く、爺さんの人形が気に入って、依頼に来る物好きは結構多かった。

たいていは、大きな外車で乗り付ける、年齢も様々な、高級かつカジュアルな服装の女性たち。あるいは、ちょっと癖のある顔つきの五十代、六十代と思われる、やはり高級カジュアルな服をまとう初老の男性たち。

そういう物好きな面々の物好きな嗜好が、爺さんの財布と律の小遣いなんかを支えている。

こんな祖父を持つためだろうか、天賜の才だろうか。律が人形造りをはじめたのはずいぶん小さいころだったらしい。もちろん最初に手ほどきをしたのは爺さんだ。そのころはまだ、律はこの館には住んでいなかったが、あっというまに人形製作にのめりこみ、かなり足しげくかよったと、爺さんがずいぶん前に教えてくれた。

七つの時、両親が事故でいっぺんに亡くなり、爺さんにひきとられてからは、人形作り一色の日々を送っている。「あれか？」

作業場の隅、藤椅子の上に、白い布ですっぽり包まれた物体があった。結構大きい。大人が一抱えにできるかどうかという感じだ。

近付こうとした俺を、意外にも律がとめた。後ろから左腕をつかんだその手の、意外な強さに、俺はおもわず眉をひそめて振り返った。

「なに？」

「見せない」

「へ？」

思わず、素っ頓狂な声がでた。

「なんでだよ」

「依頼主の希望だから」

「出来上がった人形を見せるなって？」

「そう」

律は自分自身が人形みたいなすまし顔で頷いた。

「出来上がった人形を誰にも見せないこと。その人形を依頼主が持っていることを誰にも知られないようにすること。誰にも言わないこと。それが依頼の条件。だから、弘にも見せない」

俺は、何だかすっきりしないものを抱えながらも、しゅしゅ人形から離れた。

「まあ、それならしかたないよな……」

「そう、しかたないよ。弘にみせられないのは残念だけど」

部屋に戻りかけた俺の後ろで、また笑い声がする。振り返ると、こちらに横顔を向けた律の唇に三日月みたいな笑みが刻まれている。

俺は溜息を吐いて、天井を仰いだ。

時々、俺は思う。

天才というのは、きっと律のような人間のことをさすのだと。

幼い頃から修行を始めたという事実だけでは、律の人形の持つ魅力は説明がつかない。

有能な師匠からの適切な指導。

修練に費やした膨大な時間。そして常人を凌駕する集中力。すべてがそろって、天が与えるという才は開花する。

人形作りの天才。

勿論、専門家は違うことを言うかもしれない。理解できる奴は他にはいないかもしれない。

だが、取り敢えず俺は律を天才と認める。そして、多分、時間の経過が、俺の正しさを証明するだろう。

付け加えるなら、律の変人ぶりが、ふりだけじゃなくて真性なのも、天才と呼ぶにふさわしい。

律の作る人形は律の才の具現として、どれも『えもいわれぬ』と形容できる風格を漂わせている。

確かに、数は少なかったが、爺さんの客には幾つか譲られもしたし、それが誰かの目に留まることもない訳ではなかっただろう。

だが、名指しで注文が来るほど、派手にはやってなかったのは確かだ。だから、俺はこの“特注品”という言葉に、何やらよからぬ予感がした。

このごろ、律はおかしい。だが、俺はあえてそれを追求したくはなかった。律はいつだってどこかおかしかったし、常識というものと仲が良かったことは、出会って以来、一度たりともなかった。

子供にしては感情の起伏がなさすぎた。行動が読めないなんて事もしょっちゅうだった。

ただ、無神経に他人の気持ちを踏みにじるような奴ではないし、犯罪だけは起こさないの、俺はいつも放っておいた。

今回もそれで乗り切れると思った俺の予想は、しかし大きく裏切られるのだった。

その日、俺が、叔母さんの家のドアを、息を潜めるようにしてくぐったのは、午後十時を回った頃だった。中学生の頃から既に、六時までに帰宅しなければ、律の家で夕飯をたべて帰るものとみなされるのが日常になっていたから、小さな明かりがついただけの、無人の台所には叔父さんの分の夕飯だけが、ラップにくるまれておいてある。

ほんのちょっと前に帰ってきたらしい叔父さんと廊下ですれ違ったが、叔父さんは何も言わなかった。俺は軽く会釈して、いつもの無関心をやり過ごし二階へ上がった。

俺のねぐらは一番下の従兄弟の部屋の一角にある。今年、中学二年生の洋介は、かなり前から反抗期に入っていて、猛烈に俺を疎んじている。

今日も部屋に入ってきた俺を忌々しげに一瞥すると、CDのボリュームを上げ、雑誌に視線を戻した。

その背中からは、『なんでお前なんかがここにいるんだよ』と、今まで何度も面と向かって言われた台詞を無言で俺に投げつけていた。

洋介の所有物にあふれた狭い八畳の部屋の隅に、俺の机がある。上部がベッド、その下に机と本棚とが一体になった型で、黒い背もたれのない丸椅子がセットになっている。近所のお兄さんからもらったものだ。

そこだけがこの家の中で許された俺の領域だった。

部屋は従兄弟のものだし、俺の持ち物は一切合切机に収納されている。着替えですら机の下にあるカラーボックスに収まっている。

高校の制服は何がいいかって言うと、明日着てゆく服を悩まなくて済むってことだ。小学校の時は従兄弟のお下がりだけを着せられていたから、オシャレな子供の多い昨今は、それは「最高にいい気分」だった。

ベッドの下にあって、圧迫感著しい机の上には無駄なものはほとんどない。教科書と筆記用具と、生活用品。歯ブラシとか櫛とか...

俺は本当にこの家の「居候」なのだ。

そんな俺の持ち物の中で、唯一実用品でないものは、一体の人形だった。

体長約三十センチ。

木製、性別不明。

手足は動くがへにゃん、とした力ない体勢でしか座れない。おかげでいつもこの人形は首をかしげた姿勢で俺を見ている。

風体は蒼い着物に白い帯、と純和風だ。おかっぱ髪で、切り揃えられた前髪の下からぎょろんとした目が見ている。この瞳だけはすごく精巧な造りになっていて、濡れたような瞳の輝きがこの単純な人形に、驚くほどの生命感を与えている。

これが、律が俺にくれた唯一の人形だ。

俺が律に無心した最初の人形。

そして、きっと最後の人形だろう。

俺は人形の木でできた頬をそっとなでると、頭の中だけで挨拶した。

(ただいま、カク)

すると、動くはずのない人形の目玉がぎょろっと俺を見上げ、カクはゆっくりと瞬きした。じっと俺を見る生きた瞳。俺は、それを確認して薄く笑い、学校の宿題を片づけるべく、鞆を開いた。

そう、律の人形は綺麗なだけじゃなかった。つくりものの体の一部が必ず生きているのだ。

何故か律はいつも人形の一部分だけを念入りに作った。勿論、律の作る人形は全体の技巧も美しさも並大抵ではなかったが、（カクは例外。なにせ、律が七つの時に作った、超初期の作品である）更に、人形の部位の一つに必ず一ヵ所際立つ出来栄えを与えた。

木の人形の瞳にぬれたような光を与え、あるいは振り袖を着た少女の手に、柔肌の滑らかさを与える。すると人形のその一部だけが、生を得たように動くのだ。

例えば俺のカクは、体のほかの部分は一切動かないのに、光る瞳は視線を動かし、瞬きさえする。その瞳だけで喜怒哀楽すら語るのだ。

カクの目。

その瞬きの動きを自然にするために使われた、まぶたの材料を聞いたとき、俺は正直、度肝を抜かれた。

死産した牛の胎児の皮。欧米の「自動人形」の材料を参考にしたそうだ。

それ以来、俺は、人形の材料については聞くのをやめた。振袖の人形の手の柔らかさを生かすために、何を使ったか、律が教えてくれるといったことがあったが、俺は断った。

正直ものすごく怖くて、聞く気になれない。

それさえ考えなければ、律の人形はとても面白い。

夜中になると小さな白い足袋を履いた足で歩き回るお雛様。くるくるカールした髪の毛が伸びる金髪の少女。つかんだものを二度と離さない赤ちゃん。笑う武者。飛ぶ天使。

こう書くとほとんど怪談だが、実態もそう変わらない。彼らは、とにかくとんでもなく常識外れで、たまに人に貰われていっても、すぐに律の所に返ってくる。

そんな人形に律はいつもちょっとだけ不満そうなのが、俺にはおかしかった。

何故律が、人形に命を与える事が出来るのか、その秘密を俺は知らない。

この十年間、俺はそれを追求したいと思った事はない。不思議だと思っても、その原理を明らかにしたいとは考えない。一度として、律に問いただした事はないし、律自身ももしかしたら、わからないのかもしれないと思っている。

それはそういうものなのだ。

律の人形は、そういうもの。律という奴はそういう奴。俺はそれでいい。

俺が律の人形を見て分かるのは、律がどれ程人形が好きか、ということ。時には、律が求める“何か”が人形に起る不思議な力の源なのかもしれないという、淡い予感を抱く事もあるが、それは結局推測に過ぎない。

それで俺には十分なのだ。

律の作った人形は、瞳だけが生きているものが一番多い。彼らは本当に優しい目をしているから、貰われると滅多に帰ってこない。

俺のカクのように目付きが悪いのは例外だ。こいつのガンの飛ばしかたには、年期が感じられる。

でも、気に入っていた。にっこり微笑む優しい女の子の人形よりも、俺はこれが一番好きだった。

風呂に入って布団に入ってから、俺はしばらく天井をぼーっと見つめながら、律が仕上げた人形のことを考えていた。

ひどく大きな人形だった。椅子の背くらいあったから一メートル近い。あるいはあの布の膨らみ方からみて、人の等身大くらいある人形が座ってたとも考えられる。どちらにしても、今まで律の作った人形の中では最大級のものだろう。

俺は不思議だった。

なぜ、出来上がったものを他人に見せないように、依頼主は要求したのだろう。他人に見られる事を嫌がる人形とは、一体どんなモノなのだ。あのときの律の笑いといい、最近の奇妙な言動といいどうにも気にかかる。

寝返りを打つと伸びた髪が目にかかった。

明日、律の家にいったら爺さんにいって、髪を切ってもらおうと思った。爺さんは副業で床屋もやってる。どういつてか知らないが、客は思い出したように、ぼつぼつとやってくる。そして爺さんの家のふつーの板間で、カットしてもらっている。特にも長い髪をばっさり切る女性が多い。料金は無料。ただし、その髪は人形の材料になるという、おまけつき。果たして、客の目的はどっちなのだろうかと、時々俺は考える。髪を切ることなのか、自分の髪を持つ人形を作ってもらうことなのか。

でも、自分の髪を備えた人形を作りたがる女性の心理なんて、ちょっと考えただけでもすごく怪談めいて怖いので、じいさんにも律にもその辺りのことを尋ねたことはない。

ゴールデンウィークは俺にとって、結構辛い季節だ。休日だから叔母さんの家族が、家にいる比率がぐっと高くなる。叔父さんの会社はもちろん、叔母さんのパートもお休みだし、中学生の洋介も、大学二年の勇二さんも、専門学校に通っているさつきさんも連休中、でっばなしてことはないから、必然的に顔を合わせる機会が増える。

そんな憂鬱な連休第一日目の朝、台所で、事件は起こった。

「弘。あんた、もうすぐ誕生日でしょ。なんか欲しいものある？」

突然前触れもなく長女のさつきさんが言った言葉は、俺の脳みその中で解読されるまで十秒近くかかった。

「……は？」

珍しく家族全員がそろったよく晴れた休日の朝。別にCMに出てくるような真っ白なテーブルクロスや、花の生けた花瓶なんてものはないが、味噌汁はうまい、そういう食卓。

その片隅でいつも通り、俺は無言でご飯を一膳食べ終わる所だった。

そこへこの爆弾発言は落とされた。

いつもは短気のさつきさんは、俺の鈍い反応に苛立つ様子もなくもう一度聞いた。

「高校入学祝いも一緒にしようと思ってるんだけど、かまわない？」

俺は、箸を宙で止めたまま、さつきさんの顔をまじまじと見詰めてしまった。

この俺にお祝い？

邪魔なお荷物の為に？

すぐにぶしつけな態度だったと気付いたが、周りを見回すと、俺の反応はそれほど際立ったものでもなかった。叔父さんは新聞をめくりかけ、勇二さんはテレビのリモコンを持ち上げたまま、洋介に至っては、口の中の卵焼きを噛むのさえ忘れて凍り付いている。

だが、驚きはそれだけじゃなかった。

「そういえば、そうだったわね。五日？ そうじゃあ、何か好きなものつくりましょうか。食べたいものある？ 弘」

叔母さんがそう言った。

俺を含む全ての視線は一斉に叔母さんに移る。自分のお茶碗にお代わりをよそっていた叔母さんは、自分の指についたご飯粒を食べながら、何？ というように見返す。

「弘？」

さつきさんの声に俺は焦った。さつきさんと口をきくこと自体、半年ぶりくらいなのだ。それなのに、急にお祝いとは一体、どういう風の吹き回しだ？

その風は北東の方角から吹いてるんじゃないかと、馬鹿な考えが疾風のように頭を過ぎる。この家に来て十年。この家の人達のカレンダーに、俺の誕生日というものが、存在していたということ自体、信じられない。

「…お、おいわいなんていいです…」

俺は吃りながらそう呟くのが、やっとだった。勇二さんも叔父さんも洋介も何も言わないが、さつきさんに対して非常に複雑な感情を抱いているのは雰囲気でもわかる。

さつきさんは、俺の返事に、ふーんとつぶやいて、「じゃあ、適当に考えるわ。楽しみにしててね」と微笑んだ。

正直言って俺は、楽しむどころか、背筋をぞわぞわとかけあがる寒気に、身が震えるのを感じるばかりだった。

「どう思う？」

ピンボーゆえに遊びにいく場所もなく、当然のように十時には既に律の家にやってきた俺は、珍しく何も作業をしていない律に尋ねた。

「何があったんだと思う？ さつきさん、恋人ができた時だって、大学受験に失敗した時だって、俺に関心なんか、向けなかったぜ。なんで突然、奇妙な行動に走ったんだろう。一体どんな環境の変化に遭遇すれば、突然居候に優しくなるんだ？」

「子供でもできたんじゃないか？」

勉強机の椅子にこしかけた律は至極真面目に答えた。

その真剣さを知るが故に俺は、床に腰を下ろした体勢から、脱力してクッションの上に倒れた。

突っ伏した俺の耳に、律の声が続ける。

「せっかく人が優しくしてくれてるんだから、行為は素直に受け取っておけば？」

「やさしい？」

「優しいじゃないか。お祝いをくれるって事よりも、お祝いしてくれるって事がさ」

俺は眉をひそめた。

「でも何で今になって？ 俺があの人に引き取られることになって、一番激しく拒絶反応を見せたのはあの人だぜ？」

「そうだった？」

「そうだよ。『何で他人と一緒に住まなきゃならないのよ。絶対いや』って、面と向かっていわれたぜ」

「いつ？」

「俺が七つで、あの人が一歳くらいの頃」

「子供の言ったことだよ」

「俺だって、子供だったよ」

すると、律はなんとも言えない顔をした。

うまく形容できないが、さえない感じの顔だ。俺は意地悪く、律を横目で見あげた。

「やけにさつきさんをかばうじゃないか」

「別に、かばってないよ」

「叔母さんも変だったなあ。俺、『何が食べたい？』なんてきかれたの初めてだぜ？」

「嬉しくなかった？」

「嬉しい訳ないだろ。気味が悪いよ」

するとまたまた律は変な顔をした。今度は何だが、がっかりしたような顔だ。

なんか引かかった。

「なんだよ、何でお前そんな顔するんだよ」

「どんな顔？」

「がっかりしてる」

「そうかな」

律は自分の頬手に手を当てながら、引き出しから鏡を持ちだして覗き込む。そうして、一分ぐらいじっと自分の顔を観察してから、

「わからない」

と、言った。

「……俺にもわからん」

俺はそうコメントするのが精一杯だった。

「お前の思考回路が」

「そうかな」

「そうだよ」

俺は長い前髪をかきあげ、溜息を吐いた。

すると律は俺の顔をじーっと凝視して、

「弘、またやせた？」

「やせてないよ」

「体重計乗った？」

「この間の身体測定じゃ変わってなかった」

「あの体重計いい加減だったよ。僕が家で計ったら、三キロも違ってた」

「ふーん」

俺が全く話に乗ってこないことを見て取った律は、自分の持っている手鏡を俺の眼前に突き出した。

「よく見てみなよ」

投げやりに視線を向けると、いかにも『ものぐさして伸びました』って感じの長髪をした、なまっちょい男が映っている。俺は、その顔の中に大嫌いなピンボー神の面影を見出して、すぐに目をそらした。

「……髪切らなきゃな」

「直視できない位、自分の顔が嫌いなんだ」

事情を知っている律がずばりという。

俺はそっぽむいた。

「けっこう見られる顔なのに」

「……………」

「女子に人気あるの知ってた？」

「……………」

「男子の友達が多いのに、女子を近づけない硬派なところがいいんだってさ」

「……………」

「そのくらいで済んでればいいけどさ、ホモだって噂立ったら、おしまいだよ。弘」

「なんじゃそりゃあッ」

「いや、例えばの話」

飄々とした顔で、律は呟く。

ちなみに、律は非常に女子の友達が多い。

人気もある。ちいさい頃からそうだった。外見も女性的という訳でもないし、女性の親近感を煽る気質には見えないのだが、昔から気付くと自然と女子の輪の中にいた。人形を作っていることが割と有名だったせいだからかもしれない。

反面、そのせいで男子からは結構攻撃の対象になったが、一見おとなしそうな律は大抵の喧嘩に勝った。

それはそうだろう。人形造りとしての力仕事をしているから、筋力は見かけ以上にあるし、反射神経もいい。ゲームばかりやって、泥遊びも山登りもしたことがないような軟弱な昨今の子供が勝てる相手ではない。

そのうえ、やたらと口が立つ。普段はそれほどおしゃべりじゃないくせに、一度攻撃に回ると立て板に水。時には教師ですらぐうの音が出ないほど、舌が回った。教師すらやり込める小学生。あの頃はそんな律が自分の友達である事が非常に痛快だった。今思えば、結構嫌な子供だったのだなあと、教師達が気の毒に、ならないこともない。

一方俺はといえば、律が喧嘩する時は、大体一緒にいた。別に味方をするわけではなく、喧嘩相手の子供に巻き込まれるのだ。相手の弱点を探ろうとするのは大人も子供も同じ。律の傍にいて、なおかつ両親はいない、しかも父親に捨てられた子供で、叔母の家に引き取られたなんて境遇の俺は、吊るし上げにするには格好の標的だったわけだ。

俺としては叔母の肩身が狭くなるので、相手を叩きのめすことはできない。そういう気の回る、やはり可愛げのないガキだったので、大体は暴力をさけて、律直伝の姑息な手を使った。自分を殴った相手を水溜まりに転ばすとか、律の蹴りが届く場所に相手を誘導するとか、相手のベルトを抜いてズボンを落とすとか、その程度である。

律の方は手加減無しで、やりたい放題していた。そのくせそれを鼻にかけるでもなく淡々としている。だから、『律君はカッコいい』ということになり、更に人気上がる訳だ。

だが、軽く盛り上がる子だけではなく、本当に律には女の子の友人が多い。男の友達も『弘の友達だから知り合いになる』という程度で、自分から率先して付き合うようなことはしない。

この辺も律の“変わり者”といわれる所以の一つといえる。

そんなこんなで、律の女の子のコンネクションは結構すごい。今度の依頼もそっちからきたのかな、と、俺が考えていると、ドアを叩いて、真っ白い頭の爺さんが顔を覗かせた。

「おお、弘、きとったか。お前が言ったアルバイト、みつかったぞ」

「本当か？ 爺さん」

俺は立ち上がって戸口に駆寄ると、爺さんからメモ用紙を受け取った。俺の後ろからついてきた律が肩越しに覗き込む。

「なに、バイトって？」

「頼んでたのさ、爺さんに。求人情報誌も買うと馬鹿にならないから、爺さんの知り合いでアルバイト必要としてる人をね。爺さんって顔広いだろ？」

「.....アルバイト...するの？」

「するに決まってるだろ。高校生になって何が嬉しいって、堂々と働ける所だよな。さすがに中卒で就職するのは、将来のこと考えても不利だし、この不況じゃ難しいから、高校行かないで働くのは嫌だったけど、アルバイトはするぜ、がんがんに」

「運送会社の引越しのアルバイトじゃよ。力仕事だし長時間拘束されるが、払いはいいぞ。連休前に急に何人かアルバイトが辞めて、人手を欲しがってた」

「連休中ずっとだな。丁度いいや」

思わずにんまりした。叔母さんの家族と顔を突き合わせる連休は、普段から身の置き所がないのに、それに加えて今朝のさつきさん達の異様な態度。居づらいことこの上ない。

ところが突然、律が後ろからメモをかすめ取った。

「律？」

律は、すごいスピードで紙片を小さく折りたたみ、俺が何の反応も示せないでいるうちに、一センチ四方以下になってしまったそれを、口の中に放り込んだのだ。

ごくんと嚙下する律の喉を、硬直した俺と爺さんは呆然と眺めていた。

「だめ」律は、一言いった。

「は………？」

「アルバイト禁止」

「なんだとうッ？」

俺は律の襟元を締め上げた。

「じゃあ何か、お前は俺にいつまでも本一冊買えないビンボーでいろって言うのかッ！」

俺はビンボーであることを恨んじやいなかったが、疎んじてはいた。自分の好きなものを買いたいという気持は人並みにあるのだ。大学の受験料だって貯めなくちゃならない。

「アルバイトしてると、成績下がるよ、学年主席なのに」

「学年主席なのは当然だろう！ 二つもランク落として今の学校に来たんだぞ！」

そう、自慢ではなかったが、俺は勉強だけはよくできた。中学になってからは特に力をつけて、学年トップを三年間独走してきたのだ。

「そもそも、俺の志望校が二つも下になったのは、お前のせいだろうがッ！」

事もあろうに、律は俺の公立高校受験の願書を偽造したのである。

俺は当初、県下でも一番といわれた公立高校にいくつもりだった。私立は最初から眼中になかったし、志望校の校風も気に入っていた。

ところがである。

律は担任の教師に、「書き損じてしまいました」と大嘘をつき、白紙の願書をもう一枚入手した。それをもとに、俺の筆跡と叔母さんの筆跡をそっくり真似て、高校名を入れ替えた偽の願書をつくるや、俺の持っていた本物とすり替えて提出したのである。職人だけあって、こういった小手先の技は憎々しいほど達者だ。

勿論担任は、事前に聞いていた志望校と違うことに気付き不思議がったらしい。だが、複雑な家庭の事情を知っている担任は、変に気をまわして、直接俺にきかず、こともあろうに諸悪の根元たる律に事情を尋ねたのだ。

『……先生、聞かないでやってください』

心優しい新米教師に向かって、律は神妙な顔をして、いけしゃあしゃあと、そう答えたという。

願書が受理されて受験票がやってきた時はもう遅かった。公立高校の願書は遅れば、受け取ってもらえないし、一度出せば絶対に変更はきかない。

どんなに騒いでも全ては後の祭り。

そんなわけで、俺は自宅から徒歩で通える、律と同じ高校に行くことになったのだ。幸運だったのは、律の志望校が上の下ぐらいのランクだったことだろうか。

それでも俺は、あの時本気で律に殺意を覚えたものだ。今回のアルバイト阻止ぐらいなら、まあ今までも似たことがなくもない。だがあの時の気持を思い出した俺は、すぐさま、今までたまった鬱憤を、遠慮なく発散するべく臨戦態勢に入った。

対する律も、こっちが本気で怒ったのを察したのだろう。すっと腰を落として、身構える。

数ヶ月ぶりの取っ組み合いの喧嘩に、いざ突入と思ったそのとき、爺さんが職人の馬鹿力で俺をはがいじめにした。

「弘。まあ、おちつけ」

のんびりした声とは裏腹に、鉄のような固い腕が俺を引きずり、部屋から連れ出す。

「爺さん、はなせよッ！」

「まあまあ、何か食べるか？ 羊羹があるぞ。髪が伸びたな、切ってやろう」

磨き込まれた廊下を引きずられながら、見る見る遠くなる律の部屋のガラス戸に怒鳴る。

「律！ わがままもいい加減にしろよなッ！」

律は閉まりかけたドアの隙間から、盛大にあかんべをした。

あれはだめだ。

長年の付き合いで、これ以上逆らうと、立ち入り禁止令が出る事を察した俺は、諦めておとなしく引きずられていった

。

爺さんの散髪屋は、台所の板間でやる。俺はいつも通りに、前髪を少し長めに残すように注文して、肩の力を抜いた

。

目の前に大きな姿見が置いてあるので、視線を自分の顔からずらして上に向けると、爺さんの無骨な手が器用にひらめくのが見える。

「運送会社の方にはわしから、断っておくよ。取り敢えずお前の予定を聞いてから返事をするといってあるから、角は立たんだろう」

ぶすっとした顔で、返事をしなかった俺は、しばらく目を閉じたまま、はさみの入る音だけをきいていた。

「……何を考えているんだ、あいつは…」

俺の背中で爺さんが低く笑った。

「さあなあ……」

「爺さんの孫だろうが……」

「そうだなあ……」

願書事件があった時も、爺さんはこういう言い方をした。そしてその後で、「あいつはあれなりに、お前によかれと思ってやってるんだよ」と言った。

そう、たとえば、居候である俺が、県下一番の高校に行くことによって、叔母さんの子供である従兄弟達よりも、ずば抜けて優秀であることを、証明してしまうと、よけいにあの家に居ずらくなるのではないか。とか。

それに対して、律の志望校は、兄弟の中では一番優秀な勇二さんの母校とそうかわらないランクで、なおかつ多くの大学から指定校推薦を取っていて、そこで主席を通せば確実に有名大学への道が開けるとか。まったく子供らしくないことを考えて策を弄したらしいと聞かされた俺は、結局、怒りのやり場をなくして、律を一発殴って許してやった。

もし、俺が俺自身で気遣って高校のランクを下げてしまったら、俺はこの先もずっとそんなことを気にしながら生きていかなくてはならなくなる。だから、律はあえて何も言わず勝手にやったのだ。

まわりは、律が「俺と一緒に高校に行きたい」というわがママを通したのだと思っている。それが違うということは、俺が知っていればいいことだ。

「学校は楽しいか？」

爺さんは小学校の時も中学になったときも、同じ事を聞いた。

「楽しいよ」

俺はしぶしぶ答えた。

「とりあえず、クラスの奴等とは仲良くなったし、今の学校はわるくない」

「そりゃ、よかった」

「なあ、なんで、律は俺にアルバイトさせたくないんだ」

「お前と遊ぶ時間がなくなるのが嫌だったんじゃないだろう」

爺さんが、もったいをつけずにくれる答えは、大体が言い逃れだ。本当に重要な事は自分で考えろというのが、爺さんの口癖である。俺は、心の中で『根性のネジくれまがったところは、この爺さんと孫はそっくりだぜっ』と、悪態をついた。

見るからに不機嫌な面々に黙りこくっている俺に、爺さんは取り繕うように咳払いをして、

「ま、何か考えがあつてのことじゃろう」

と、言った。

「本当かよ？」

じと一っと、下から見上げると、爺さんはふっと曖昧な表情を浮かべて視線を反らした。

「たぶんな」

結局その日の午後は、律に会わないまま俺は図書館に向かった。夕飯は爺さんがくれた小遣いで（俺は爺さんが「これでなんか食え」と千円札を差し出した時、「俺は明日死ぬんじゃないか」と、思った。いままで爺さんがそんなことをしたのは、一度もなかったからだ）格安ハンバーガーショップに入り、いつも通り十時過ぎまで時間をつぶして、家に戻った。

だが、ついていない時はとことんついていないものだ。別にアルバイトをどう見繕うか悩んでいた俺が、家に帰りつく前に雨が降り出した。勿論傘なんてもってない俺は、猛ダッシュで走ったが、無駄なあがきでしかなかった。雨脚は益々強くなり、家の明かりが見えた頃は下着までびしょびしょ。

既に走ることを放棄して、重い足取りで玄関の戸をくぐった俺はつかれきっていた。

濡れて張り付くジーパンに辟易しながら、玄関を上がった所で、ぱったり叔父さんと鉢合わせた。ビールをあけた後ののだろうか、心持ち顔を赤い。風呂場に向かう所だったお爺さんは、小太りの気のよさそうな顔に戸惑うような表情を浮かべ、少しためらった後、俺に声をかけた。

「.....お...弘、おかえり」

俺は数秒固まり、実に十年ぶりに聞いた言葉を反芻してから、ぎこちなく「ただいま」と、答えた。そのぎこちなさと言ったら、まるでこの口がその言葉を紡ぐ為につかう筋肉のことを忘れきっていたような感じだ。

だが、そう言った途端、叔父さんの、最初はちょっと固かった態度が、ふっと和らいだ。

「なんだ、びしょびしょだな。雨降り出したのか」

「あ.....うん」

俺の方はまったく調子を取り戻せない。

「先、風呂入れ。俺は、一杯やった所だからな。もうちょっと酔いが覚めてから入るよ」

「え.....でも.....」

「心臓に悪いって、さつきにいわれてな」

なんとも返事を返せないでいる俺に、茶の間から叔母さんが声をかけた。

「弘、先入っちゃいなさい。夕飯は？ 食べてきたの？」

「あ.....はい」

「それなら、ほら、そんな格好のままでいると、風邪ひくわよ」

俺はどきとした。叔母さんのそんな言い方は、何故かひどく懐かしくて、痛いような気持ちになった俺は軽く頭を下げて、着替えを取りに二階へ駆け上った。

俺は、湯船の中で膝を抱えながら、急激に変わって行く周りの態度に頭を悩ませた。

もしかしたら俺は、本当に後一ヶ月くらいの命なのかもしれない。だから突然優しくし始めたのかもしれない。

この間の健康診断の結果で、変な病気が見つかったのだろうか。なにかすごく悪いニュースが俺に告げられるべく、この後に待っていて、それを和らげるために、周りの人間が優しくし始めたのだろうか。

次から次へと馬鹿馬鹿しい考えが頭を過ぎる。笑い飛ばそうとして、律が「やせた」と言ったことを思い出した俺は、風呂場の鏡に鼻先がくっつくほど顔を近づけた。

面長の顔。薄い唇。眉間に眉を寄せた不機嫌そうな不安そうな顔。

だがいくらならめっこしようと、いつも見慣れていない自分の顔が、やせたのか太ったのかなどわかるはずがない。

「一体何なんだ.....」

自分のやってる事も馬鹿らしくなって、手桶のお湯を鏡にぶちまけた俺は、ひとまず考えることを放棄した。

風呂から出て、裸足でぼんやり廊下を歩いていると、台所から声がかかった。

「弘。ちょっときなさいよ」

首だけ、暖簾越しにのぞきこむと、深紅の上の明かりだけがついた台所で、よそ行き姿のさつきさんが、冷蔵庫を開けていた。

今帰宅したところらしい。

「すいません。先にお風呂いただきました」

ぺこっと頭を下げると、彼女は綺麗に手入れした眉を片方だけ上げて俺を見て、「いい、いい」というように、手

を振った。きれいに手入れされ、小さなストーンとピンクのグラデーションに彩られたネイルが、ひらひらと花びらのようにゆれる。

冷蔵庫からオレンジジュースを出してコップにあける。それから、冷えた野菜ジュースの缶を取り出して、俺に放ってよこした。

「ハンバーガーだけじゃ、栄養足りないわよ」

俺はかっと頬が熱くなるのを感じた。さつきさんはにっと笑って、俺の脇を通りすぎざま、俺のぬれた髪を軽く叩いて、「おやすみ」と、言った。

俺はその夜、瞳を光らせ俺をじっと見上げるカクと見つめ合いながら、ただひたすら、今一体自分の周りでなにが起きているのかを考えつづけていた。

カクのきらきらした瞳は、『そう悪いことが起こってる訳でもないぜ』と言っているらしかったのだが、俺は全く樂觀的な気持にはなれなかった。

翌朝。

なんとなく寝不足のまま、台所に降りて行くと、叔母さんが振り返って、「おはよう」と言った。

「おはようございます」と答えながら、どうしてもまた、この現実感のない環境の変化を考え始めてしまう。そこへ叔母さんが、「弘、お皿並べて」と、声をかけた。

叔母さんは今まで俺を使ったことはない。家の中の手伝いですら、けしてやらせなかった。それは、「甥っ子をこき使っている」という、噂を恐れたからだとおもう。

俺はおとなしい羊みみたいな気分で、言われるままに、皿を並べたり味噌汁をよそったり、箸や小皿を用意したりしはじめた。

俺が朝食の手伝いをしていると、勇二さんが朝刊を持って入ってきた。叔母さんの手伝いをしている俺をみて、まだ剃っていないひげ面をこちらに向けて、数秒リアクションに迷うような素振りの後、「はよ」と、地の底から響くような声で言った。

「おはようございます」

物音がして、ガラス戸の所をみると、しわくちやのTシャツを着た洋介が、親の敵でも見るように俺を睨んでいた。無言で俺の脇をすりぬけ席につく。

俺が漬物の入った器を持ったまま、この手の中のを、テーブルに置くべきか否かを悩んでいると、後ろから叔母が声をかけた。

「今日も、藤枝君の家に行くの？」

俺が答えるより早く、勇二さんが聞く。

「藤枝って？」

「あ……律の、藤枝律のことです」

「ほら、人形造りのお爺さんと暮らしてる目の細い子よ」

台所に入ってきたさつきさんが、椅子に腰掛けながら、そう言った。顔は洗ってたけど、まだ化粧はしてない素っぴんのさつきさんは、俺にも「おはよう」と挨拶する。さつきさんが律のことを知っているとは意外だったが、それについてコメントしている余裕はなかった。

「お使い頼みたいんだけど」

叔母さんが席につくのには気付いて、慌てて椅子に腰を下ろす。

「藤枝さんの家に行く途中に、お豆腐やさんがあるでしょ。そこでね、豆乳を買ってきて欲しいの」

「と、豆乳ですか？」

「この間の検診でね、コレステロールが増えちゃったのよ。そうしたら、この間テレビで、コレステロールには豆乳がいいって。でも、この辺のスーパーで売ってる豆乳は成分が調整されているのばかりなのよね。だから、豆腐やさんのを試してみようと思って」

そういつて、叔母さんはぱっちりとした目を見開いて、「油揚げも、おねがいね」と続けた。

律の家は、竹林に囲まれた小さな丘の上にある。丘の麓はぐると小川に囲まれて、丘の背後はうっそうとした林が続く。アスファルトの車道から小さな小川の上を大きな板状の石が向こう側に渡され、橋の代わりになっている。それを超えて、竹林を抜け、玉砂利の道を上って行くと、急に曲がった道の奥に古めかしい明治作りの洋館が現れる。

ガラスのはまった引き戸を、荒々しく後ろ手で閉めた俺は、勝手知ったる家の中を駆け足で進み、律の部屋に飛び込んだ。

「聞けよ！ 律！ 今度は豆乳だぜ！」

「.....あれはまずいよ、弘。僕は嫌いだ」

律はまだ布団の中にいた。寝ぼけた顔で、ぼさぼさの髪に手を当てながら、起き上がって俺を見る。

俺はその脇に膝をつくと、声を張り上げた。

「昨日はお祝い！ 今日『豆乳を買ってきて』だ！ 俺がなんか悪いことをしたってのか？ 一体どうなってんだよ！」

律は元々細い目を、さらにほそくしたままぼけ一っと、俺の声を聞いていたが、三分ぐらいしてからようやく、

「.....豆乳...買ってこいって？」

「そうだよ！」

「.....叔母さんが？」

「ああ！」

うーっと、低いうなり声が、天井を仰いだ律の口から漏れる。

「どっか...おかしくなったのかな.....」

「俺が知るかよ！ 叔父さんは、俺に風呂を譲ってくれるし、今朝は勇二さんまで俺に声をかけるし、変わってないのは、洋介だけだよ」

「洋介君.....」

「あいつの、ガンたれてる顔だけが救いだ.....」

どっと疲れを感じて、力なく肩を落とすと、律はまた昨日と同じ奇妙な顔をした。

「睨まれてほっとするの？ 弘、それ、変だよ」

「ちっがーう！ いつもと変わらない態度がほっとするんだ！」

俺はわめいたが律の反応は鈍かった。

律はこのごろよくする奇妙な表情で、ぼーっと俺を見ていた。

勿論、その日の帰り、俺は豆乳を買った。お使いを頼まれている以上、夕飯前に帰らない訳にはいかなかったから、六時頃には家に着いてしまった。叔母さんは手渡された豆乳をみるとひどく喜んで、「ありがとう」といい、暇だったら夕飯の手伝いをしてちょうだい、と気軽に続けた。

俺はすさまじく暇だったし（家には俺の読める本も雑誌もないし、テレビは叔父さんが占領していた）断る理由もない。そこで、風呂の掃除をしてから、叔母さんを手伝って、揚げ物の用意をすることになった。

あれこれ指図されてばたばたと動くだけだが、こうして傍で見ると、叔母さんの手際の良さは、なかなかのものだった。流石は主婦という感じだ。律の家の家政婦さんともまた違う。

毎日ご飯を食べさせてもらっているのに、叔母さんが料理をしているのを傍で見たのは、はじめてである事に気付く、またもや俺は落ち着かない気分になった。

そしてふと、こんな風に台所で、死んだ母親の手伝いをした事があるのかさえ、思い出せない事に気付いた。「油取り用の新聞紙出してくれる？ 冷蔵庫からトマトときゅうりとなす。あ、大根も出して、大根おろし作ってちょうだい」

元々俺はそれほど不器用じゃないし、律の所で家政婦さんの手伝いもしたことがあるから、指示を出されれば、割と機敏に動ける。だが手伝う相手が相手なだけに、内心、なにかへまをするんじゃないかと、冷や汗がとまらない。

俺が一生懸命、力任せに、大根おろしを作っているとふと叔母さんがイカフライを揚げながら、こちらを振り返って言った。

「大根は、怒りながらすると辛くなって、優しい気持ですると甘くなるのよ」

思わず手が止まった。

（それは俺が下ろした大根で俺の感情を読み取れるということか？ それとも、その味によって、言いがかりをつけるぞという新手の脅迫か？）

その時俺の脳裏を過ぎったのは、こんなどうしようもない考えだった。

突然、背中で鋭い破裂音がしたのは、料理ももう終盤といった時だった。弾かれるように振り返ると、叔母さんが右手を押さえて揚げ物の鍋から飛びのいていた。

「おかあさん！」

一体何が起こったのかわからない俺の脇を、帰宅したばかりのさつきさんが飛ぶように通り抜け、叔母さんの腕をつかんで、水道の水をすごい勢いでかけ始めた。

「さつきさん？」

俺はなんだか自分が叔母さんを傷つけたような罪悪感を抱えながら、恐る恐る声をかけた。すると彼女は叔母さんの腕をつかんで洗い桶に突っ込み、蛇口からほとばしる水で冷やしながら、顔をしかめてふりかえった。

「ああ、大丈夫よ。撥ねた油で火傷しただけだから。イカは、他のものよりひどく撥ねるから、結構ひどい火傷したりもするの」

ぎょっとして、視線を向けると、叔母さんの右腕に黒ずんだような傷があるのが水越しに見える。火傷だとしたら、かなり範囲が広い。ひどい火傷だ。

「病院に行った方がいいんじゃないですか？」

「なんだ、どうした」

俺の声に驚いたのだろう。叔父さんが隣の茶の間から、声をなげた。

「叔母さんが怪我を……」

振り返り様言おうとした俺を、さつきさんが遮った。

「なんでもないわ、おとうさん。ちょっと油が撥ねただけよ」

とんでもない話だった。ちょっとどころの火傷ではない。だが、さつきさんは俺に言葉を紡ぐ余裕を与えなかった。
「揚げ物の火を止めて。中に入ってるイカを油切って上げてちょうだい。くろこげになっちゃうわ」

「あ、はい」

「それがすんだら、冷蔵庫見て、アイスノンある？ ないならビニール袋に氷を入れて。袋は二重にして、氷の角で破れやすいから」

俺が氷を出している間に、叔母さんの腕を水から上げて、ガーゼのハンカチを傷に当てた上から、俺の渡した氷を当てた。

「大丈夫よ。火傷ははじめにきっちり冷やすことが肝心。それさえしっかりしとけばね。何よ、その不審そうな顔は、弘。お母さんの顔みてみなさいよ、それほど痛そうじゃないでしょ」

言われてみれば、その通りだ。けっこう大きな火傷に見えたのに、けろりとした顔をしている。

結局そのまま料理はさつきさんとバトンタッチ。俺は、部屋に戻っていい、といわれて、仕方なく二階に上がった。

部屋に洋介はいなかった。俺は、机の上のカクとにらめっこをしながら、なにか釈然としないものを感じていた。

何か引っかかる。多くのことが変だ。だが、何がどの程度、どう変なんだろう。叔母さんの怪我。さつきさんの態度。

本当に、あんな大きな火傷で病院に行かなくていいのだろうか。火傷は後になってかなり痛みが出るものだ。ちらっと見たただけだが、大きさも手首から十五センチくらいのところまで腕の表面全体にあった。見てるこっちさえ身震いするような痛々しい傷だった。

カクの黒い瞳を、じと一っと眺めていると、ふと何かが頭の中でひらめいた。それが形となって掴み取ろうとした瞬間、がらっとドアが開いて、洋介が入ってきた。

人形とにらめっこしている俺をみて、一言。

「ヘンタイ」

階下から、さつきさんが「ごはんよー」と呼ぶ声が聞こえてきて、つかみかけたような何かは、どこかへ霧散してしまった。

連休三日目の朝、朝食がすむと、ひげを剃り終えてすっきりした顔の勇二さんが、自分の部屋に俺を招いた。警戒心と不信感を隠しながら部屋に行った俺に、勇二さんは「これやるよ」と、ベッドの上に山となった服をゆびさした。

「俺、もう着ないからさ。捨てるにや惜しいし、洋介にはでかいしな」

「はあ……いいんですか？」

ぱっと見たただけでも、ほとんど着古していないものばかりだとわかる。数回袖を通しただけという、新品同様のものもまざっていきそう。

「いーんだ、いーんだ。Gパンとかはお前細いからサイズがあわねーだろーが、シャツとかはけっこう使えるだろ」

勇二さんはがっちり骨太な体格の人だ。身長も俺より十センチ以上高い。

「でも、なんでですか？」

なんで親切にしてくれるんだ。と、言う意味で聞いた俺に、勇二さんは、少し照れくさいような顔をした後、
「いやー、実はここだけの話なんだけどさ。俺、このあいだ新しい彼女できたんだよ。その子が、前の彼女の知り合い
でさ。俺が今着ている服のほとんどが、前の彼女の好みで買ったものが多いって、知ってるんだよな」

俺は眉根を寄せた。なんだか、話が予想しない方向に進んでいる。

「『私のことが好きなら、前の彼女が選んで買った服なんて捨てて』って、すねるんだよ。『私の趣味じゃないの』
って、唇とがらせてかわいく言われたら、ちょっと、逆らえないよな」

渋く声を抑えようとしている努力も見受けられるのだが、意図に反し語尾は弾み、目尻は下がっている。のろけてい
るのは、火を見るより明らか、尻に敷かれているのはさらに明白。

「だからといって、着られるもの捨てるのも罰当たりだろう？ 一円を笑うものは、一円に泣く。服一着を笑うものは、
服一着に泣くのだ！」

何がおかしいのか、自分の発言に気を良くしたのか、勇二さんは、豪快に声を上げて笑っている。

最早、わけが分からない。

推察するに、『恋の清算を笑うものは、恋の清算に泣かされる』ということだろう。今の彼女に捨てられる前に、昔
の恋を捨てようというわけだ。

「と、いうわけで、遠慮なく持ってってくれ」

そうして俺は、勇二さんの善意だか、なんだか良く分からない「恋の形見」たる服の山を前に、立ち尽くしたのだ
った。

「それでどうしたの？」

勇二さんがおまけにくれた土産のポテトチップスをつまみながら、律はきいた。

「貰ったよ、もらいましたとも！ 服に罪はないからな！」

ほら、このとおり！ と、持ってきた巨大な紙袋二つを派手な音と共に荒荒しく、友人の目の前に置いた。

こうなるとほとんどやけくそだった。

貰った服は確かに役に立つ。勇二さんの前の彼女の趣味はシンプルかつ実用的で、幸か不幸か、俺も文句のつけようがない。

だが、まず服の置き場所に困った。俺にはタンスがないのだ。カラーボックスの容量などたかが知れているし、少しでも俺に許されたテリトリーからはみ出せば、部屋の主たる洋介の機嫌が、劇的な下降線を辿るのは、火を見るより明らかだ。

現に、俺が服を抱えて部屋に入るや、まるで仕事帰りのドロボウと出会ったような胡散くさげな顔で、俺を睨んでいたのだから。

「で、どうして服がここにあるの？」

「ここに置かせろ。俺には置き場所がない」

いいけど、といって、律はまたあの奇妙な顔をした。

「何でそんな不機嫌なのさ。皆優しくしてくれるのが、何で嫌なんだ？」

「だって、変じゃないか！ 十年間、同じ家にいながら、ろくに口もきかなかった人たちが、ここへ来て急に、掌を返したみたいに、態度が変わったんだぜ？ 自分が知らない間に、不治の病にでもおかされてるんじゃないかって気になるぜ」

溜息を吐いて、律の前に腰をおろす。

「それとも、俺をどっかべつの所にやるんかね。十年前みたいに」

「え？」

「言ってなかったけ？ 俺はいっぺん、別の所にまわされて、もう一回あの家に戻ってきたんだよ。父方、母方いりみだれ、親戚中で俺を押し付け合って、最後にあそこにまいもどったわけさ」

俺はごろんと座布団に横になって、律の顔を見上げた。

「一番始めに、あの家にやってきた時、なんていうかな...叔母さんの家は、すごく混乱してしまったんだ。小さかった従兄弟達は、初めて会う俺をあからさまに警戒したし、叔父さんは俺をどう扱っていいのかまるでわからない風だった。何より叔母さんが、俺の親父を.....あのビンボー神を嫌いぬいていたからな.....」

俺は父親似だ。だからこそ、あのろくでなしのビンボー神を知っている親戚達は、その面影を持つ俺を疎んじた。あんな男の子供を家に入れるなんてとんでもないと。

俺は別に、どうでも良かった。俺に対するレッテルも、父親に対する罵倒も。あれが父親だと思ったことはないし、親類たちの評価も関心がなかった。幼いながら味方が一人もいないことは悟りきっていたからだ。

俺の母親は、ふつうの人だった。ふつうに優しくてふつうに人が良かった。すごい美人という訳でもなかったし、天才でも馬鹿でもなかった。

ただ、たぶん男運だけはまるでなかったのだと思う。

一方、俺のビンボー神の方は、顔も頭もずば抜けて良かったが、性格是最悪だった。悪人ではなかったらしいが、同様に、常識も罪悪感もなかった。有名私立大学を出て就職したもののすぐに退職。ふらふらしながら、派手に女性をとっかえひっかえしていた。

そんな男との結婚を、当然、母方の親類は猛反対したらしい。だまされているのだと、目を覚ませと、いくら行っても母はきかずに、駆け落ち同然で結婚して、俺が生まれた。

母について言えるのは、ひどく母性本能の強い人だったということだろう。『あの人には私がついていなければ駄目なの』と、幼い俺に何度も言い聞かせていた。

父親に捨てられるまでは、俺は純粋に母の言葉を信じていたものだ。

俺にとって、彼女はただ一人の母だった。代えるものないただ一人の家族だった。

記憶の中の母はいつも微笑んでいる。辛くなかったはずはない。それでも彼女は笑っていた。それだけで、あの人がすごい、本当にすごい人だったのだと思える。端から見ればどんなに馬鹿な女でも、俺から言わせりゃ最高の母親だった。

そんな母に似ず、最低のビンボー神に似ている自分の顔が、俺は好きじゃない。

まったく好きじゃない。最低最悪である。

「でも、結局弘を引き取ってくれたなら、やっぱり、嫌いなだけじゃないんじゃないの？」

「叔母さんは、俺の母さんは好きだったのさ。でも俺はきらい。ビンボー神に似てるからな。昔、いわれたよ。『あの子は、あの疫病神にそっくり』ってね」

俺は溜息を吐いた。

「.....なんか...今の状況は、崖っぷちからけり落とされる寸前の、座り心地の良すぎる椅子に座らされてるみたいだよ」

落ち着かない、と呟くと、そう、と、律が呟き返した。

「おかえり、弘。夕飯は？」

俺が家に帰ると、台所で待っていた叔母さんが、俺を振り返って言った。テーブルの上にきちんとラップして用意されている自分の分の夕食を見ると、、まさかすませたとは言えない。

「まだです」

叔母さんはちょっと変な顔をした。俺は気にせず夕飯を食べ始めた。空腹ではなかったが、食べられないことはない。

ふっと視線を上げると、叔母さんと視線があった。叔母さんは口をもぐもぐさせている俺を見て微かに微笑み、席を立った。

俺は箸をとめた。

叔母さんの笑顔を正面から見たのは始めてだった。つまりそれは、叔母さんの笑顔が俺に向けられたことが、今まで一度もなかったということだ。その事により気付いた俺はショックを受け、ショックを受けている自分を見つけ、さらに傷ついた。

俺は箸をおき、食べるのをやめた。

どうしてこんな嫌な気分にならなくてはいけないのだろう。相手の挙動の一つ一つに、信じられないほど振り回される。

今まで散々、人のことを無視しつづけてきたのに、この掌を返したような態度の変化は、一体なんだというのだ。

自分の顔がだんだん陰しくなっていくのが分かって、それを押さえることはできなかった。

今更、善人ぶって俺が喜ぶとでも思っているのだろうか。六つの俺が周りの冷たさになれるまでには、相当な時間があった。相手の言葉に怯えていることを隠せるようになったのも、本当は、つい最近なのだ。

ようやく慣れた。やっと自分の虚勢を保てるようになった。周りの言葉に府生まれる小さなとげの一つ一つに、いちいち傷を受けることもなくなった。

それなのに。

「弘？」

ただ、叔母さんの穏やかな顔がひどく癪に障った。居たたまれなかった。

その時、隣の茶の間で洋介の怒鳴り声が響いた。いつも静かな叔父さんが珍しく声を荒げているのも聞こえる。すぐに、ガラス戸が開き洋介が飛び出してきた。

「洋介、またんかっ！」

「うるせえっ！」

吐き捨てた洋介と真っ正面から視線がぶつかる。途端に洋介の顔が憎々しげに歪んだ。

「まったく笑っちゃまうぜ、親父もおふくろも居候のこんな奴に気を遣って！ 俺が出来が悪いのがそんなに恥ずかしいかよ！ 認めたくないんだろ、カスみたいな男の子供より自分の子供がでしが悪いなんて！ だから、いくら勉強ができてなくても怒りもしない、学校サボろうが、叱りもしない！ 滑稽だよ！ やってらんねんぜっ！」

「洋介！」

叔母さんが、叱咤する。

俺は初耳だった。洋介がこのごろ態度がとげとげしかったのは知っていたが、授業をサボるほどエスカレートしていたとは。

「そうだろうがっ！ いい加減認めろよな、この出来の悪いのがお前らの子供なんだよ！ 期待するだけ無駄なんだよ！」

「よ...洋介いい加減にしないか...」

叔父さんの怒声は、しかし、明らかに半分腰が引けていた。

そんな程度の威勢じゃ、洋介を止めることはできないだろうな、と思ったが、案の定予測は当たった。

「今まで散々、こいつを無視してきたくせに、このごろは何だよ！ 掌をかえしたように、へこへこしやがって！ こいつが高校に主席で入って、ようやくこいつの実力がわかったってか？ 今更、俺達にこいつと競わせるのは無駄だって！」

洋介は立て板に水と、己の両親を罵り続けた。

おそらく、ここ数年、多様な雑誌から、大量の罵倒用語句を学び、ボキャブラリーを増やしていたのだろう。続く罵倒の多様性と、攻撃力の高さに、俺は奇妙に感心する。と、同時に俺は自分の中にあるもやもやを全て、洋介が代弁して吐き出しているように思えて、胸をすくような思いがわき上がってくる。

ただ、洋介自身は、胸がすくどころではなく、己の罵倒に、感情がますますヒートアップしているようだった。俺は、そのまなざしの危うさに、自分の中でアラームが鳴るのを感じた。

ちょっとまずいんじゃないか...？

叔父さんと叔母さんも同じものを感じたのかもしれない。必死に洋介をなだめようとする。しかし、どんな言葉も、逆効果でしかないようだった。洋介は、俺を振り返り、両親に向き直り、足を踏み鳴らして怒鳴り続けた。

「何だよ、お前ら！ なにか？ こいつに今から恩を売ってこうって言うのか？ 将来有望だとわかったから？ 反吐が出るぜ！」

叔父さんは、迷うように口を噤み、叔母さんはさっと表情を消して、洋介の頬を打った。

「なにすんだよっ」

幼さの残る顔に朱がのぼった。怒りに震える唇。今まで、一度だりとも手を挙げられたことのなかった洋介は、力任せに腕を振り回した。

相手を叩き返そうとしたのかもしれない。あるいは相手を払いのけようとしたのか。感情が高ぶった動作は、滑稽なほど要領を得なかったが、予想外の勢いで、相手を突き倒す結果となった。

叔母さんの小太りの体が、たたらを踏んで倒れる。後ろにはダイニングテーブル。

手を伸ばしても間に合わなかった。

鈍い音がした。ごきりと。

倒れ込んだ叔母さんは頭をダイニングテーブルの角に強打し、その首は不自然な形に折れ曲がっていた。

「うわあああああ」

叫んだのは洋介の方が早かったと思う。

呆然としたまま、俺は動くことができなかった。洋介は叫んだ後、震えたまま一步も動かない。そう思った瞬間、弾かれたように洋介が部屋を飛び出そうとした。叔父さんが咄嗟にそれを羽交い締めにする。

「落ちつけ、洋介！」

「はなせよっ」

パニックにとらわれた洋介は、力の限り暴れまくって、叔父さんから自由になろうとする。俺はぎこちなく首を動かして、それを見つめるだけだ。と、洋介の腕に押しのけられた叔父さんのからだは、不自然なほど軽々と後方に飛んだ。

中年太りの叔父さんの、出っ張った腹の向こうに頭が見えなくなり、叔父さんは受け身も取れずにしたたか頭を床に叩きつけ、動かなくなった。

洋介は自分の行動がもたらした、意外な光景に、ひくっと、喉をしゃくりあげると、半分正気を失ったような目で俺を見た。

奇妙な静寂が、場を、支配していた。

頭が凍り付いたように、言葉が見つからなかった。

投げ出された叔母さんの腕、スリッパは片方テーブルの下に転がって、顔は乱れた髪で半分見えない。

「電話を……救急車を呼ぶんだ……」

かすれた声でようやくそれだけ絞り出した。

洋介が、怯えるようにあとずさった。

「お、おまえが…やれよ」

「やるんだ。人間はそう簡単に死んだりはしない。早く呼ぶんだ」

「だって！ 首があんなふうにまがってるじゃねーか！ 親父だって……」

洋介の目にぶわっと涙が込み上げた。

「親父だってぴくりとも動かない…胸だって上下してないし……息…してないんだ……」

「……なんだって？」

俺はようやく動いた。叔父さんの傍に行き、胸に手を伸ばしかけ、こんな事で心臓の鼓動はわからないと、動転している自分を叱咤して、脈を取るべく首をさぐった。首、喉仏のすぐ横のくぼみに、指を当てる。

洋介が俺のすぐ後ろから覗き込みながら、息をひそめて様子を伺っている。

「脈が……ない」

俺の言葉に洋介は、泣き声ともうなりともつかない声を上げて、床に座り込んだ。だが、そんなものにかまっていられなかった。

「そんなはずはないんだ……」

そう、脈がないはずがない。頭を、後頭部をどれほど強打したとしても、木の床である。コンクリートにたたきつけられ、頭蓋骨が陥没しているわけでもない。出血さえしていないのに、即死するなどということが有り得るか？

良く考えてみれば倒れ方も変だった。

いくらもみ合い、がむしゃらに動いたとしても、所詮相手は中学生である。ましてや洋介は160センチ程度の小柄な少年だ。体育系の部活をしているわけでもないその腕力は、同じく純然たる文系人間の俺だって、腕相撲で勝てる程度のもののはず。

それが、中年太りした、体重七十キロの男を振り払うことなどできるだろうか？

俺は、勢いよく立ち上がると、テーブルの脇に倒れたままの叔母さんの脇に座り込んだ。

奇妙な形に曲がった首が、正直ひどく気持が悪いが、そんな事は言っていられなかった。

俺は叔母さんの腕にある包帯に手を伸ばした。昨日、火傷した場所だ。水腫れになっているか、真っ赤にはれているだろう。だが、その包帯をはずしながら、俺はぼんやりとある事を予測していた。

それでも、ガーゼの下からあらわれた腕を前に、俺の体を震えが走った。

叔母さんの腕は、黒く焼け焦げ炭化していた。それは人の肌ではなかった。触るとゴムのようなものがぼろぼろとはがれる。その下から出てきたのは木だった。

俺は、俺はどうしていいかわからなかった。胸の奥底から湧きあがってくる感情は、黒くもなく白くもなく、形もなくただ激しい。

「なんだよそれは……」

「人形だ……」

怯えの色を隠せない洋介に、俺は呟いた。

ただ独り言のように。

「え？」

だから洋介の反応など頓着しなかった。どうでも良かった、他の奴などどうでも。

ただ、説明が欲しかった。

「おいっ！ どこいくんだよおっ！」

泣き声をあげる洋介に、俺は出会ってから始めて、猫をかぶりもせず怒鳴りつけた。

「うるせえっ！ 自分で何とかしろっ！」

俺は雨の降り出した夜の町を、律の家に向かって走りつづけた。

荒々しく部屋の戸を開けると、律は、落ち着き払って、椅子ごとこちらに向き直った。

すべてを承知しているようなその表情に、俺の中の怒りが爆発した。

「どうして、あんな事をしたんだ！」

「あんなこと？」

律は微かに首をかしげた。

「お前、この春から、禁止されていたことをできるようになったと言ったな……」

律は頷きもせずじっと俺を見つめる。

「考えたんだよ……お前が人形造りの中で唯一しなかったことは何だろうって。爺さんに人形を教わったお前は、どんな事だってチャレンジした。人間の髪の毛を、特殊加工して材料にしたり、俺に爪の伸ばさせて、それを人形の手につけさせたこともあった。お前の望んでいたのは、いつだって人間に近い人形を作ることだった。その目的の中でお前がしなかったことは何かって。俺は最初、思い付かなかった。お前は、人に皮膚をはいで人形につけるなんて、犯罪になるようなこと以外は、すべてやってたからな」

「……人間そっくりに作る為に、人間の素材を使ってもうまくゆかないよ。皮膚も髪の毛の人体からはなされれば、死んでしまう。別の物を使うからこそ、偽物は旨く作る意味がある。そうだろう？」

「そうだな……」

俺は地を這うような声で相づちをうった。

「うまくできてたよ、あの人形は。あの人形を見てようやく気付いたのさ。人形の一部を必ず、生きた人間そっくりに作り、それによって命を与えることのできるお前が、唯一しなかったこと…」

律は俺から視線を逸らした。

俺はかまわずに続けた。

「原寸大の人形を作ることだ。体すべての部位を人間そっくりに作ること。お前はそれだけはけしてやらなかった。俺はお前が自分で自制して、人間そのものの人形をつくらないのだと思ってた。それがもたらす結果を恐れて…。…違っただんだな…お前がそんなことを気にするはずがなかった…ただ爺さんが禁止していたからやらなかったんだ」

人間そっくりに作られた、人間そのものの造詣と大きさを持つ人形。

そして、そう意図して作ることによって、人形に命を吹き込むことのできる律の力。

「そう」

律は淡々と言った。

「僕がそんなことを恐れるわけがない。だから、解禁されると同時に、今まで造り貯めておいた部位を組み立てて、人形を完成させたのさ」

ふっと、細い目に笑みが浮かぶ。

「いい人形だったろう？ 弘」

俺は思わず殴り付けていた。

「どうしてあんな事をした！」

律は殴られた顔を押さえもせず、真っ直ぐに俺を見返した。

「うれしくなかったの？ 皆優しくなっただろう？」

「うれしいと思うのか！ あんなものが嬉しいと？」

「だって、弘は優しくされたかったんだろう？ 居場所が欲しかったんだろう？ 優しくされたじゃないか。家族として受け入れてもらえた。何で嬉しくないのさ」

「全部芝居だったんじゃないか！ 叔父さんも叔母さんも！ お前が作った人形だった！ さつきさんもか！ 勇二さんもそうなのか！ 結局お前が作った人形たちが、俺のまわりで芝居をやったただけの話じゃねえかッ！」

「でも、ああいうのが望みだったんだろう？」

平然とした律の口調に俺は凍り付いた。

「ああいう家族が欲しかったんだろう？ 誕生日を祝ってくれるおねえさんや、夕飯に何が食べたいか聞いてくれるおかあさん。風邪をひかないように心配してくれるお父さんに、理由をつけて服をくれるお兄さん。いいじゃない。何が不

満なの？」

「...お前、本気で言ってるのか...？」

「本気？」

心外な、というように律が眉をひそめる。

「じゃあ、どうしたら弘は気に入るのさ。家に帰ると、別人のように笑いも泣きもしなくなるほど、今の家族が気に入らないんだろう？ どんな家族なら、気に入るのさ」

「...注文すれば作ってくれるとでも言うのか？ 律」

湧きあがる憤怒をねじ伏せて、俺は声を絞り出した。

「俺の為に、俺の理想の家族を作ってくださいと、そういうのか...？ お前が？」

律は、困ったような苛立たしいような表情を浮かべて俺をみた。

「注文があればつくるよ」

律がひどく遠く感じられた。目の前にいるのは、十年も一緒に過ごした友人ではないのか？

「...作り物の家族か...」

俺は拳を握り締めてうなだれた。泣きたいような、わめき出したいような気持だった。

「ニセモノの家族か...優しい言葉もうそっぱち...だから、俺はあんなに嫌な気分になったんだ...」

「...それは違うね」

「なに？」

「人形の思いはニセモノじゃない。弘が嫌な気分になったのは、叔母さん達の人形だったせいじゃない」

「勝手なことを言うな！ 何もわかりはしないくせに！」

吠えるように怒鳴りつけても、律は一步もひかなかった。

「証拠もあるよ。じきにわかる。弘が嫌な気分になったのは人形が原因じゃない」

「律！」

「怖いんだろ」

律は、傍にある自分の作った日本人形を手に取りながら、俺を横目で見た。

「弘は怖いんだよ。優しくされるのが。相手を信じられないから、優しくされると不安になる...自分のことが嫌いだから...」

「律ッ！」

「だから、僕のように感情をおおっぴらにしない人間という方が安心できるのさ。友達は沢山いるのに、弘は僕以外の人と深く関わろうとはしない。それは弘が本当は、いつも、捨てられるんじゃないかって怯えてるからだ」

「やめろッ！」

それ以上聞いていられなかった。そんな言葉は聞きたくなかった。

けれど、律はいつも通りの静かな顔で言った。

「臆病者」

いたたまれず身を翻すと、部屋の入り口にいた洋介と視線が合った。おそらくあの状況に独りでいることもできず、あの後俺を追いかけてきたのだろう。

その啞然とした表情が、視覚に突き刺さる。

俺はそのまま逃げるように律の部屋を飛び出した。

頭に血が上って、血管がどくどくいていた。体は完全に感覚から切り離されているのに、心臓の鼓動だけは、はっきりと感じ取れる。

走り続けている間中、手足は震えて、いつ倒れ込んでもおかしくはなかった。それでも何かに突き動かされるように足は動き、霧雨の中、俺は走りつづけていた。

住宅街を抜けて繁華街の裏路地へ入り込む。そこでようやく走るのをやめた俺が、のろのろと路地を進むと、人の気配に驚いた野良猫が、ビールケースの間から飛び出し、路地の奥に消えた。

ビルの間の細長い空に、繁華外のネオンを受けて鈍く光る雲が見える。

俺は猫のいたビールケースに腰掛けて、うつむいた。

真っ白な頭。

耳の奥で、脈打ち続ける血の流れだけが感じられる。

心にぽっかり大きな穴ができていて、何かを考えようとするたびに、全ては穴の中に落ちていってしまう。

俺はいくつもの感情や思いがその穴の中に落ちて行くのを感じながら、身じろぎもせず、雨にぬれていた。

雨音に重なる幾つもの足音、人の声、笑い声、怒声。近付いたり遠ざかったりする音の渦。そのなかから、ヒールの甲高い足音が近付いてくる。

俺は、その音もいずれ遠くなるだろうと思いながら、ぼんやり雨にぬれたアスファルトをみていた。だが、足音は通り過ぎる代わりに迷うように、行ったり来たりを繰り返し、そして、俺のいる路地に入ってきた。

「弘...」

視線を上げると、傘もささず、ヒールを泥だらけにしたさつきさんが、息を切らせながら近付いてくところだった。白いブラウスも明るい色のタイトスカートも、色が変わるほどびしょびしょになっている。

ファンデーションの崩れかけた頬が、赤く上気し、ずっと走ってきたのだろうか、しばらく、口もきけないほど息を切らせていた。

もしこれが作り物の人形だとしたら...そこまで考えて俺は思考を止めた。

「どうしてここが？」

「偶然、見かけたって言う人がいて」

「ああ...そう...」

それ以上、口をきく気にもなれない。俺は黙って視線をそらせ、雨の音に意識を向けた。

あからさまに相手を見殺した俺の態度に、しかし苛立つ様子もなく、さつきさんは袖で顔に当たる雨をぬぐい、少し躊躇した後、きり出した。

「ごめんなさい。人形を依頼したのは、私なのよ」

俺は数秒、その言葉を頭の中で反芻した後、自分でも気付かないうちに、すがるように抱えていた右膝をおろした。

「なんだって...？」

「律君には女の子の友達が多いでしょ？ 私の友達が、律君の人形のことを知っていたの」

頭が、おかしくなりそうだった。

ここにいるさつきさんは、ホンモノなのか？ それとも律が作ったニセモノなのか。

ホンモノなら本当のことを言っているのか。

ニセモノなら、嘘をついているのか。

目の前の女は、俺の混乱も知らずそのまま、言葉が続ける。

「体の一部が生きてる人形。私もみたわ」

ホンモノなのか。

ニセモノなのか？

「弘...？」

「気安く俺の名前を呼ぶな！」

俺はゆらりと、立ち上がった。

「楽しかったか？ 俺の反応を見て面白がってた訳か！ それほどまでに俺が疎ましいなら、面と向かって出て行けって言えばいいだろう！ 俺があの家に来た時にあんたがそうしたように！」

怯えた顔で、さつきさんは一歩下がった。当然だろう。俺がむき出しの感情をぶつけたことなど、今まで一度もなかったのだから。

その顔が泣き顔に変わっても俺は、怒りを漲らせたまま相手を睨んでいた。容赦する気は全くなかった。

彼女は、幼子のようにしゃくり上げながら言った。

「ごめんなさい。でも、律君をせめないで。彼に頼んだのわたしのよ。私が今度のことを考えたの」

このままここにいと、自分が何をするか分からなかった。感情をねじ伏せ、身を翻そうとした俺を、さつきさんはすすめるような声で止めた。

「聞いて！ おねがい」

血の繋がりは嫌いだった。姪だけあって、声が似ている。こういう時に限って、似ていることに気付いてしまう。

母が泣いているような錯覚に陥る。

「あたし、弘がまだ中学にいる頃、学校帰りのあんたをみたことがあるの。お母さんと私で、買い物をしてたとき、通りの向こうをあんたが友達と一緒に歩いてた。...私、あんたが声を上げて笑ってるところ始めてみたわ.....ショックだった」

背中を向けたまま、俺は沈黙を守った。

笑わなかったわけじゃない。笑う理由がなかったんだ。あの家の中では。

「私、あんたは外でも家と同じだと思ってた。辛気くさくて、友達なんか一人もいないんだと勝手に決め付けてた。でも、学校の先生とか、近所の人に聞いても、あの時みた姿が、そのまま外でのあんただって聞いて、ようやく家の中にいる時の様子のほうがおかしいんだって気付いたの。それを知った時に一番ショックを受けてたのはね、お母さんなの。お母さんが、弘の中学校の卒業式、行ってたの、知ってた？」

俺は振り返った。表情を読み取ったんだろう、さつきさんは鼻をすすって大きく息をつく、頷いた。

「嘘じゃないよ。本当。それでね、その時はじめて担任の先生から、志望校のことを聞いたの。志望校を直前で変えたことも、お母さんは知らなかった。保護者欄にサインと印鑑はしたけど、おかあさん、志望校の名前にも気を止めてなかった」

それは知っていた。

俺だって一応報告したのだ。さすがに書類を偽造された、とは言わなかった。婉曲に、志望校が変わったことがわかるような言い回しで、それを告げた。だが、叔母は何の注意も払わなかった。「そう」の一言だけだった。それで、彼女が俺の志望校の名前すら知らなかったことを悟った。

「お母さんからその話を聞いた後で、私、噂で律君が勝手に志望校を変えたんだって、聞いたの。友達の妹が律君のクラスメートだったから、その子が色々、噂のこと教えてくれた。それで彼女から紹介してもらって、私、律君に会いに行ったの」

彼女は涙を堪えてしゃくりあげた。

「律君は、そんなにいろんな事は話してくれなかった。聞いたのは、高校受験の時のことだけ。...あんたが志望校を迷ってたって」

律が俺の迷いに気付いていたことに、俺はずっと気づいていなかった。律が書類を偽造するまで知らなかった。

かなり迷ったのだ。従兄弟達に気兼ねして、志望校のランクを下げるのは嫌だった。だが、我を通せば俺は一層、あの家にいづらくなる。

志望校を決めた後も、悩んだり悔やんだりした。

だから、あんなにもあっさり律を許せたのだ。律がしたこと、俺自身がほっとした、という事実があったから。

もし自分で自分の意志を曲げれば、俺は一生後悔する。律は自分が悪役になることで、俺の感情の行き場になってくれた。

「私、あんたが高校を決めるとき、律君がしたことを聞いて、律君がどうしてそんなことをしたのか、すぐに分かった。それで」

さつきさんが涙の下から必死に言葉を紡ごうとするのを、俺は冷めた目で見ていた。

「それでね、そんなふうにあたし達を気にしながら、あんたがこの先もやってくなんて、そんな風にしちゃいけないって、思ったの」

「それが、人形をつかった疑似家族をつくった事と、どうつながるんだよ。俺を哀れんだとでも言うのか。大体、本物の二人はどうしたんだ。あの二人も、この茶番に大賛成だったって訳か？」

矢で射抜かれてもしたように傷ついた顔をする彼女の反応を俺は楽しんだ。今まで、されたことを仕返しするような、残酷な喜び。

「お、お父さんとお母さんは旅行に行ってるわ。二人とも私がやってることは知らない」

「知っているかということ以前に、信じるかという問題があるだろうけどな」

薄い笑いが浮かんでくる。すぐにそれを消して俺は訊いた。

「で？ だからなんなんだよ」

「...弘。お母さんを攻めないであげて、あの、あんたのことが嫌いな訳じゃないのよ。ほんととはとても気にかけて

るの。でも、あんたのお父さんのことがあったから、今までずっとどう接してたらいいかわからなかったのよ。一番最初に、あんたを傷つけたから…」

一度引き取りながら、俺を放り出した。親戚中をたらい回しにされ、俺はもう一度叔母の所に戻ってきた。

「あんたが、出て行って言ったんだろ」

「それは…」

言いよどんでさつきさんは、涙をぬぐった。

「ごめんなさい。ひどいことを言った。だから、嫌うんだったら、私を嫌えばいいわ」

顔をしかめ俺は鼻で笑った。

「なにを今更」

「…そうね…いまさらね…」

さつきさんは歪んだ笑いを泣き顔へと崩して、また泣いた。

「律君の所に行った時、律君はこう言ったわ。『人形は、人間次第で泣きもするし笑いもする。人形に向き合う人間が笑えば微笑み、怒れば不機嫌になる』と。そしてそれは人間も同じなんだって、笑いかければ相手も笑ってくれるって。だから、私があんたに笑いかけたら、あんたも笑い返してくれるかと思ったの。もしお母さんからあんたに笑いかけられれば、あんたが笑ってくれるじゃないかって。…でもお母さんには今から自分を変えられるだけの余裕はないの。今までずっとそうしてきたから、変えたくてもどうやっていいかわからないのよ」

「だからニセモノを？ 人形を使った訳ですか。人形芝居で人の心を動かそうと？」

わざとらしく、慇懃に訊ねた俺に、意外にも彼女は真っ直ぐに瞳をみつめて答えた。

「そのひとそっくりに作るから、その人の思いを反映して動くと、律君は言ったわ。私はその言葉を信じたの。…弘、あれはお母さんの本心なのよ」

『そうじゃあ、好きなものつくりましょうか』

『なにかたべたいものある？ 弘』

はじめての、優しいことば。

「家の空気を作っているのは、お母さんとあたしだわ。だから、私達が変われば勇二も洋介もついてくると思ったの。洋介はまだ子供だったから反発したけど、勇二はすぐにかわったわ。お父さんは最初から、お母さんに気兼ねして、とまどってただけ。不器用だけれど、優しい人なのよ。きっとすぐになじめる。...だって、別に憎みあってる訳じゃないんですもの」

この十年。

俺と叔母さんたちの間に、横たわり続けた影。俺の父親の残した負の遺産。

彼らは、俺こそが、その負の遺産だと見なした。俺自体が、父親の影。

だが、今、さつきさんの目に映るのは、違うものなのだと、彼女は言うのか。

「...あんたと、勇二さんと洋介はホンモノだったのか」

「そうよ」

俺は大きな溜息を吐いた。

彼女はホンモノだった。

そして、彼女の気持ちも本物だった。

休日、さつきさんは、すっぴんで人前に出るのは言語道断だと言って、隣の家に戻り、雑誌を回すのも嫌がり、新聞の集金も無視する。その彼女が、髪は雨と走ったせいでくしゃくしゃ、マスカラもアイシャドウも口紅も全部はげ、買ったばかりの白いシャツをびしょびしょにして立っている。

こんなひどい格好のまま、繁華外を駆けずり回って俺を捜していたのだ。

.....自殺でもすると思ったのだろうか。

「あ、あのね...」

急に黙り込んだ俺に、場を取り繕うようにさつきさんは声を上げてポケットを探った。

「一日早いんだけど」

そう言いながら差し出したのは、古い懐中時計だった。

「骨董屋さんで見つけたの。家で包装しようと思ったから、そのまんまなんだけど」

俺は差し出されたさつきさんの手の中のそれを、じっと見詰めた。

古びた時計の蓋は黒ずんだ銀製で、細かな線で文様が刻まれている。細い鎖がさつきさんの手から零れ落ち、ゆらゆら揺れていた。

その辺で売っている安物とは違う。ひどく高価なものではないだろうが、味があった。

「あげる。何をあげたらいいかわからなくて、迷ったんだけど」

照れくさそうに、涙の跡が残る顔で、さつきさんは俺の手にそれを握らせた。

「これを見て、遅くなりすぎないうちに家に帰ってきなさいよね」

そう言い残し、俺の返事をおびえるような勢いで彼女が身を翻す直前、俺は言った。

「帰るよ」

さつきさんが驚いた顔で、俺を凝視する。

俺はその顔を見ずに続けた。

「そんな格好でこんな時間に、一人で夜道を帰らない方がいいよ」

気づくと雨はかなり小振りになり、代わりに少しだけ風が吹き始めていた。

「ここ繁華街だから、酔っ払いばかりだよ。気付いてた？」

「え、なに？」

俺は、神妙な顔で、視線だけをちょっと投げて教えてあげた。

「白いシャツ、雨にぬれて、下着、透けてるよ」

さつきさんは悲鳴を上げて、腕で自分の体を隠し、俺は仕方なく上に着ていた、勇二さんにもらったばかりのすぶぬれのジャンパーを貸してあげた。

律と会ったのは、律の両親が死んだ時だ。

真っ黒な服の人々が、そろそろと竹林の道を上っていくのを見つけた俺は、人ごみにまぎれて、敷地に入り込み、以前から興味があった竹林の中へ忍び込んだ。

ところが、外から見ればさして大きくもなく、美しく開けているように見えた竹林は、中に入ると、すぐに野生のジャングルのようになって、八つだった俺はあっという間に方向感覚を失った。

どの方角を見ても、同じ風景しか見えない。

風に揺れる緑の竹のさざめきが、車道からの音を遮断し、丈高く茂る笹が、来た道さえ覆い隠してしまう。

焦りにかられ、闇雲に竹林の中を走るはめになった俺が、ようやくたどり着いたのは、古い建物の裏庭。

その片隅に鎮座した、苔むした枯れ井戸の脇に、真っ黒な服を着た律が人形を抱えて立っていた。

正直半泣きだったくせに俺は、自分の弱さを取り繕うべく、ぶっきらぼうに言いはなった。

『お前誰だよ、ここんちの子か？』

不法侵入したわりには、傲慢な台詞だったが、律はまるで気に留めた様子もなく、頷くと腕に持った人形を視線で示してみせた。

『カクっていうんだ』

俺は面食らった。自分の名前より人形の名前を先に教えるなんて、かなり変わっている。だが、俺の目はすぐにその人形に吸いよせられた。

人形の目から涙が零れていたからだ。

『……人形の顔、ぬれてるぞ……』

俺は、取り敢えずそう尝试してみた。もしかしたら、たまたまそこだけ濡れているだけなのかもしれない。人形が泣くなんてそんなこと有り得ないと、そういった分別があるくらいには、もう俺は子供じゃなかった。

だが、律は平然と俺の希望を打ち砕いた。

『泣いてるんだよ。カクは目だけ生きてるから』

『嘘つくなよ！ そんなのあるわけないじゃん』

『嘘じゃないよ。ほら、持ってみなよ』

律は無造作に人形を差し出した。

『カクは持っている人間の代わりに泣くんだ。君が持てば泣き止むよ』

至極真面目な、しかしどこか相手を試すような律の眼差しに、俺は、引っ込みがつかなくなった。ここでためらって、恐れているなんて思われたくないという意地が、胸の奥で声を上げた。表面的には平然と、しかし内心はびくびくしながら俺は、律の手からそっとカクを受け取った。

カクは俺の手に移った途端、涙をとめた。見る見る乾いてゆく人形の頬を、驚きと共に見つめていた俺の手から、律がカクを取り戻す。

カクの目から再び流れ出す透明な流れを、俺はぼんやり見つめ、そしてようやく、今泣いているのはこの目の前の男の子自身なのだと、気付いた。

カクは、持っているひとの代わりに泣く。

生きている瞳はその為のものだ。

『なあ、その人形、俺にくれよ』

律からカクの瞳の秘密を聞かされた俺は、頼んだ。

『どうしても、ほしいんだ。だめかな』

『代わりに何をくれる？』

そうきかれて俺は困った。人にあげられるものなんて、何も持ってなかった。だからといって、そんな答えは返せない。俺は恐る恐る相手の顔を覗き込んだ。

『なにがほしい？』

『.....なにもほしくない.....』

うつむいた律の顔は、淋しそうだった。

俺は、こんな淋しそうな子から人形を奪おうとする自分が、ひどく嫌な奴に思えた。人形を要求したことを悔やみながら、それでも欲しいと思う気持ちを止められず、黙り込む。

『...どうして、ほしいの？』

口を切ったのは律だった。

俺はうなだれて答えた。

『これ以上、自分が泣きたくないんだ...』

すると律は、黙って俺にカクをわたしてくれた。

そして、言った。

『そのかわり、明日も遊びに来てよね』

遠くから呼ばれて、立ち去りかけた律は、何度も振り返りながら言った。

『明日も明後日もその次も、遊びに来てよね』

俺は約束を守った。

あれ以来、俺は一度も泣いたことがない。

さつきさんと一緒に家に戻った俺を迎えたのは、洋介のいない部屋と、机の上のカクだった。

カクは泣いていた。

いま、抱いてもいないのに机の上で泣いていた。透明な流れが瞳からあふれ出て、必死に瞬きを繰り返していた。

俺は別に泣きたい気持ちなんてなかった。

哀しくもない、怒ってもいない。

それでもカクの目からは、涙があふれつづけた。指先でそれをぬぐって舐めると、塩辛かった。

俺はその夜一晩中、カクを抱いて、あふれつづける涙を、タオルでぬぐってやらねばならなかった。そうしないと、顔どころから体まで湿気て、黴が生えてしまっただろうから。

翌日は眠かったが、朝食の時間には台所に降りていった。

台所に叔母さん達の人形はなかった。洋介は下の茶の間で寝ていたらしく、俺達は数秒眼差しをかわしただけで、特に何も言わず、さつきさんの作ってくれた朝ご飯を食べた。

昼ごろ、友達と一泊旅行に行っていた勇二さんが帰ってきた。俺達は、叔母さん達が旅行に行っていることをさりげなく伝えたが、友人と夜通し飲んでたという勇二さんは、眠気に負けて半分も聞いていなかったと思う。

人形と本物の叔母さん達を入れ替えるのは、最初からゴールデンウィークの間だけだと、さつきさんは決めていたらしい。当然だろう、いつまでもごまかしきれぬ訳がないし、結局、たった数日間でさえ、繕えなかった。

ただ俺は、何故律がこの連休中のアルバイトを阻止したかったのかは分かった。俺が長時間拘束されるアルバイトに出かけてしまえば、家にいる時間は極端に少なくなる。そうすると、さつきさんの目論見が外れてしまう事を、律は知っていたのだ。

夕方、数年ぶりに二人っきりで、数日間の温泉旅行に行っていた叔母さんと叔父さんが、大きな荷物を抱えて帰ってきた。

土産を期待してというよりも、その無事を確認したいのだろう洋介が、勢い良く部屋を出た後に続いて、なんとなく俺は階下へおりていった。

視線の先の廊下で、叔母さんがパンパンに膨らんだ安物のボストンバックを、おもたげに引きずっていた。階段の途中で立ち止まった俺は、数秒躊躇した後、声をかけた。

「おかえりなさい」

叔母さんの反応は見物だった。

呆気にとられたように、俺をみあげ口をぱくぱくさせる。その様子は水中の金魚に似てなくもない。

きつと、数日前、朝食の席で、さつきさんに声をかけられた時の自分はきつとあんな顔だったのだと思うと、自然と笑みが浮かんできた。俺が微笑むと、叔母さんは片眉を釣り上げてから、さつきさんそっくりの、照れくさいような笑みを浮かべて言った。

「ただいま、弘」

そして、廊下を歩き出しながら続けた。

「あんた今日誕生日でしょう。なんか食べたいものがあるんなら、作ってあげるわよ」

一瞬反応できなかった俺は、台所から顔を出した洋介が、「グラタン」と、代わりに答えるのに思わず感謝した。

洋介は、叔母さんが茶の間に消えるのを待って、廊下に出てくると、小さく呟くように続けた。

「口止め料。別に文句ないよな」

むっつりと、不機嫌そうな顔をしているが、本当に機嫌が悪い訳ではないようだ。

俺は、笑った。

「いいよ、俺もそれで」

こうして、今年のゴールデンウィークはおわった。

その後、俺の生活にあった変化は二つ。

一つは、律の家にぱったりいかなかったこと。クラスも違うから、学校でもまるで顔をあわさなくなった。

もう一つは洋介が俺と会話をするようになったこと。あの時容赦なく怒鳴りつけたのが良かったのか、あの人形事件がかなりショックだったのか、理由は定かではない。時折、ちょっと怯えているのかというくらいの気遣いさえ見せる。

たぶん、今まで同じ部屋にすんでいたのは「ものすごく弱い犬」だと思っていたのに、実は「怒らせるとかなり怖い犬」だとわかって、ちょっとした遠慮と敬意が生まれた、というのが、適切なたとえかもしれない。

ついでに、叔父さんや叔母さんへの反抗も、かなりのソフトになったのだから、ものすごい変化と言えるだろう。

さつきさんや勇二さんとは、やはりそれほど口はきかない。接点が少ないし、生活時間もあわない。叔母さんが急に至れり尽くせりな態度になる訳でも、叔父さんの様子が激変することもなかった。

でも、空気は思ったほど悪くない。

ちなみに、洋介リクエストの俺の誕生日グラタンは、珍しい叔母さんの失敗により、黒こげグラタンになりはてた。

途方に暮れた叔母さんを囲み、さつきさんが笑った。洋介も笑った。叔父さんが笑い、勇二さんが笑い、とうとう叔母さんまで笑い出した。

俺は遠慮して、こらえていたけれど、ちょっと吹き出してしまったのを、さつきさんに見られたのは、気がついていた。

律に会う気にはなれなかった。

律があいつなりに考えて、さつきさんの依頼をうけたのは理解できた。けれどあの時、律に言われた言葉が核心を突いてただけに、どんな顔をして会ったらいいか。考えても一向に明確な答えが出ない。

俺は、このままじゃない方がいいという、もやもやした気持ちを抱えつつも、ずるずると結論を先延ばしにした。時間が経てばたつほど、顔を合わせたときの気まずさは増すとわかっているのに、今までの喧嘩のときのように、平然と足を向けることができない。

ところが、ゴールデンウィークから二週間がすぎた頃、洋介がカクの腕を折った。

狭い部屋の中で、音楽を大音量でかけ、ギターを弾く真似をしながら大暴れし、カクを机の上から落とした挙げ句、それに気づかないまま、椅子で踏んづけたのである。

背に腹は変えられなかった。

俺は仕方なく、カクとカクの折れた腕を持って、竹林の中の道を辿った。

勝手知ったる他人の家に、呼び鈴も鳴らさずあがり込む。廊下の突き当たり、建物の一番東側にある律の部屋に入ると、作業場の方から、のみの音が響いていた。新しい人形を作っているらしい。

作業場までいくべきか、なんと言って声をかけるべきか、考えに頭がいっぱいになりながら、ぼんやりあたりを見回した。床の座布団に座る人影を見つけた俺は、考えにとられて素通りした視線をもう一度それに戻し、次の瞬間、大音量でわめいた。

「律ッ！ これは嫌がらせかッ！」

部屋の本棚の前には、等身大に作られた俺の人形が、でんと座って本を読んでいた。

「弘ッ？」

何かに躓き、ひっくり返したとわかる派手な音と共に、作業場のガラス戸が開いて、律が顔を覗かせる。俺は人形を指差して怒鳴りつけた。

「何なんだ、これはッ！ こんなもんいつ作った！」

「だって...弘が来ないからさ.....」

殊勝にうつむいてみせる律が、肩を震わせ笑いを堪えているのは明白である。

「部屋が淋しくて...」

「俺は、部屋の置物かッ！」

俺は苦々しげに、律にカクと壊れた腕を突き出すと、「なおせよ」と、言った。

律は大ぴらに笑い出しながら、カクを受け取って作業場に引き返した。

作業場の丸椅子に腰掛けながら、俺は律の手が魔術師のようにひらめきながら、カクに新しい綺麗な腕を生み出すのを見ていた。律が作業するのを間近で見るのは始めてだった。

カクに新しい腕が出来て、律がカクに服を着せ直す頃、俺はこのところ頭をついてはなれてなかった、一つの疑問を口にした。

「なあ...なんで、自分の両親を作らなかったんだ、律」

自分が最も取り戻したいと望んでいる人を....

すると、律はめずらしく瞳を和ませながら、静かに答えた。

「作ろうと思ったよ。カクを作って、自分に人形を生かす力があると知った時から、その為だけに人形造りを続けてきたんだもの」

「じゃあ、なんで.....」

俺の問いかけに、律はしばし作業の手をとめて考え込むようにまゆをひそめ、ようやく聞き取れるかというような声で小さく呟いた。

「...思い出せないんだ。もう、お母さんの顔もお父さんの顔も」

視線を上げた律の顔は、かすかにほほえんでいる。けれど、律の手が触れているカクの瞳は、今にも溢れ出さんほどの涙に潤んでいた。

修理が終わったカクを受け取って、作業場を出た俺は、部屋の中央に居座った、薄気味の悪い、俺のそっくり人形に顔をしかめた。俺の後に続いて部屋にあがりながら、律は作務衣の上着を脱いで汗を拭った。

「大丈夫だよ、弘。生きてないんだ、それは。生きているようには作れなかった」

「どうしてだよ。この出来栄えなら...」

自分そっくりで気持ちが悪いが、できばえの良さは見まがえようがない。

しかし律は首を振った。

どこかさばさばとした様子で。

「駄目なんだ。自分に親しい人は、どんなに似せても本物にならない、生きてないんだ」

律はそれ以上言わなかったが、嘘でないことはわかった。俺自身からが見れば、薄気味悪いとしか形容できないが、それはひとえに並ではない技量の証だ。

だが、人形は全く動かなかったし、カクの瞳にあるような輝きは、人形のどこからも感じられなかった。

「やっぱりね。いくら人形が好きでも、本物とは比べられないからさ」

「律...」

律は、ちょっと淋しそうに笑った。

モデルになった人間より、人形の方が重要な時、律の人形は生を得る。その一方で、モデルになった人間の方が、律にとって、自分の作った人形よりも大事な時、人形に働く不思議な力は生まれ得ない。

大切であるがゆえに、どんなに似せても、人形は本物にはなれないことを知ってしまう。

それは、両親を取り戻したいと願って、人形造りの腕を磨きつづけてきた律にとっては、酷く辛い矛盾。

俺は自分が持っているカクの目が、潤み始めているのを見て、慌ててカクを、持ってきた袋の中にしまった。

部屋に流れる沈んだ空気を打ち消したくて、俺はわざとらしく腕組みをし、目の前の“本を読む弘”の人形を見下ろし、うなり声を上げた。

「ところで律。どうするんだ、これ」

「うーん。これほど弘に似てるものに、のみを入れて解体するのは、心が痛むなあ...」

「捨てろ！」

「どこに？ 粗大ゴミ？ 焼却場？ 焼いた途端、弘の体に激痛が走って、ショック死したりして」

全身に鳥肌が立つ。

「まあ、可能性のひとつにすぎないけどね」

「律！」

よほど俺の顔がおかしかったのだろう。律は腹を抱えて笑い出した。楽しげに。

声を上げて笑うと律の目からは、策士みたいな影が消える。それは、律の作る人形の優しい目にととても良く似ている。

正しくは人形達が、律に似ているという事なのだろうけど。

だが、笑顔はともかく、俺似の人形の事は笑い事ではない。俺の身にもなってくれ。律の人形である以上、冗談どころではなく本当にそんなことが起こってもおかしくはないんだ。

俺はどうすることもできずに、律にその人形を持っていることをゆるした。

。

律とは、こんな人形造りだ。

誰か律の人形欲しい人、いますかね。

人形律

<http://p.booklog.jp/book/24392>

著者：えむ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/raitohausu/profile>

発行所：ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/24392>

ブクログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/24392>